
魔法少女リリカルなのは～舞い降りし翼～

どら

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは～舞い降りし翼～

【Zコード】

Z8859

【作者名】

どら

【あらすじ】

何故か知らないが神様（仮）に殺されてしまった俺。で、予想どおりな『転生

しかも行き先は『魔法少女リリカルなのは』の世界。

俺は神様（仮）から貰ったチート能力で原作ブレイクやってやんよ！！

処女作です宜しければ温かな目で見守ってください。

プロローグ～長すぎたひりー！～（前書き）

初投稿です。

宜しければ読んでやつてくださいませ（――）

プロローグ～長すぎたら…～

真っ白な場所。

何もない空間。

そこには音もなく…いや、音（声）は聞こえている。

「「めんなさ」「めんなさ」「めんなさ」「めんなさ」「めんなさ」「めんなさ」「めんなさ」…」

先程から、一人の女性が土下座して俺に謝っている。
察しの良い方（読者の皆様）なら、お気付きだらうが説明しましょ
う。

俺こと『高峰龍斗』（一八歳）は神様（仮）により、誤つて殺さ
れてしまつたらしい。

『ひしひ』と言つのも、俺はその時の記憶が欠落しているとかで
覚えていない。

（まあ思い出せないものはしようがないが、この後の展開つてや
つぱり『お約束』のアレなのか？）

と、一人でそんなことを考へてゐる間も神様（仮）は謝り続けて
いるわけで…。

「「めんなさ」「めんなさ」「めんなさ」「めんなさ」「めんなさ
」「めんなさ」「めんなさ」…」

はあ。話が進まないから、そろそろ声かけるか。

「あ～… もおわかりましたから、取り合ひず顔を上げてください」

「「「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」」

「こや、ですから俺も別に怒つてるわけじゃなこですから」

「「「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」」

（ふむ、これでは向も進展しないままプロローグ終了の可能性も出でちゃ…？）

俺は、ふとあるものを見つけた。

それは、神様（仮）の腹の辺りから見えるプレーヤーらしき物体。

（まさかな…）

俺はそういう思い、少し右にずれて屈んで見ると…。神様（仮）はマジカセらしき物体を抱えて土下座しながら寝ていた。

（…………わ、いいな素直にキレても良こよねw）

俺はどうぞいつの笑顔で、神様（仮）に全力で拳骨をくれてやつた。

「ゴス…！」

「こつたあああい……何すんのよ……」

「黙れ」「うーーーてめえ、いい加減にしろよ……
人の事、勝手に殺して素直に謝ってるかと思えば、録音再生ループ
流して寝てるとか俺の事おちょくつてんのかー！」

「…てへ」

「てへ つじやねえ……その首へし折るぞコラ……」

俺はそのまま言つと、神様（仮）の背後に素早く回りチヨークスリーパーをかけた。

「はうっ！……」「うーーーめんなわこーーー今度はホントに謝るから～！！！
つて、絞まつてるーーギブーーーギブーーー！」

俺は仕方なく、神様（仮）を解放してやる。

「で？俺はこの後どうなるんだ？」

神様（仮）は、自分の頭を撫でながら上田遺いで答えた。

「貴方には、別の世界で転生してもうつわ。

元々、私が誤つて貴方を殺してしまつたんですから」

「なら、行き先と何らかの特典があるなら教えてくれ

と、俺が返すと少し驚いた様子を見せる神様（仮）。

「貴方、前にも死んだことあるの？何だか順応し過ぎなんだけど

「いや、何となくそんな気がしたから聞いてみたんだが。マズかったか？」

「ん~…まあ良いわ。んじゃ、これから貴方の転生先とそこでの立ち位置について説明するわね」

と言い、神様（仮）は俺に向き直って話し始めた。

（ん、実はちょっと可愛いか）

「まず、貴方の転生先は『魔法少女リリカルなのは』の世界。ここについての知識は？」

「一応、無印）st'sは見たから知ってるぞ。
てか、何で神様（仮）がりりなの知つてんだよ？」

「あら、当然じゃない。だつて私もアニメ大好きだもの。
特に深夜帯の作品はね」

「成る程、あんたもオタクか」

「当然じゃない。つて、神様（仮）って何よ！…私には『アテナ』
つて名前があるんだからね！！」

「いや、自己紹介がなかつかつたからな。最初に神様だつてのは聞
いたが、その後すぐに土下座して寝てたし」

「う、つ。…ま、まあいいわ。で、貴方はりりなのA.s.の辺りの
飛んでもらひつけ。

そこで、原作を静観するも良しブレイクするも良しよ 」

成る程。なら、俺のやることは闇の書から『リーンフォース』と『ハ神』はやて』を助けるつて辺りが妥当か? え? 何でかつて? その方が楽しいだろ(笑)

「で、俺の能力は?」

「勿論、チートおくよ 」

「おいおい。この神様(仮)改め『アテナ』マジで話わかつてんじやん。

「なら、身体強化と魔力、気を測定不能(EX) それからデバイスはイテリジェントとユニゾンの二つ。バリアジャケットはVF-25F(アルト機)アーマードパック装備みたいな感じでフェイスガードは無しの方向で。それと、変形機構も排除。でアーマードがあるから翼は展開できないんでウイングのカスタムの翼を付けてくれ。58mmガンポッドも装備で。これは速射追尾型の魔力弾をトリガーを引くことで発射するタイプでマイクロミサイルや反応弾は俺の魔力を凝縮して打ち出す。目標到達前に破壊された場合、その場で爆破し煙幕としても使用可能。

インテリジェンスは1stが大剣でイメージはダイゼンガーの斬艦刀。

2ndが双剣でイメージはサンドロックのヒートショーテル。

3rdがライフルでイメージがウイングのツインバスター・ライフル。

4thが太刀でイメージがモンハンの夜刀【月影】。

因みに、デバイスのモードが上がる毎に技の威力も上がっていく感じ

で。

んで、外見はガンダムWのデュオ。あと様々な能力解放時は瞳が金色に輝く

と、俺が一通り注文を終えると「睡然とする」アテナを見た。

「……えっと、それで全部? てか、無茶苦茶チートじゃない!! 身体強化ってどのレベルよ。寧ろ強化の必要無いんじゃないの?」

「いや、最低でもサイヤ人並の身体能力にニュータイプも欲しいな。なんせ、向こうでは戦闘なんて日常茶飯事だろ?」

「はあ…。わかったわよ。

それだけのチート星人なら、どこに行つても無敵ね。それと、デバイスの名前は決めてあるの?」

「ああ。ユニゾンが『リア』でインテリジェントが『ナハト』だ。」

名前の由来なんか考えてない。単に『何となく』で決めたのは内緒だ。

「おっけ~。てことはユニゾンは女性型でインテリジェントは男(?)で良いの?」

「ああ。リアの外見は美人なら誰でもいいアテナに任せる。あと、魔法なんかはご都合主義全開で俺の思いのままに何でもありの方向で」

「はあ~、まあ良いわ。んじゃ、向こうに送るわね。デバイス何かも向こうに着いたら一緒に居るから」

アテナはそのまま口を徐に右手を上げた。
そして…。

「じゃ～ね～」

俺の足元には漆黒の穴。

まさか…！

「やつぱりか～～～～～～！」

俺はその穴の中に落ちていった。

「ふう～。しかし、深夜アニメ見てて間違えて死亡名簿に名前載せちゃったなんて、流石に言えないわよね～。
ま、かんばんなさい『血塗られし忌み子』。
いえ、今は『純白の翼』ね」

しかし、この事故事態が必然であつたことを、知る者はまだいない。

プロローグ～長すぎたり！～（後書き）

いかがでしたか？

次回は原作介入開始です！！

宜しければ、ご意見ご感想お待ちしております。

海鳴市に降り立つも、今後の計画がない事に気が付いた今日この頃（前書き）

連投です。実は作者は何も考えずこの作品を書いているので、色々と読みにくいかと思いますが生暖かく見守って下さい

海鳴市に降り立つも、今後の計画がない事に気が付いた今日この頃

「あの糞アテナの奴、いきなり落とすか普通〜」
俺は愚痴りながらも、現在の状況を調べるべく回りを見渡した。

(ここには公園か?となると、原作での感動の舞台になつた場所しか思い付かねえな)

ま、原作どおり海も見えてることだしまあがなーだらおと決めつける。

「で、デバイスも近くに居るって話だけぞ…」

「マスター? いかがなさいましたか?」

と、俺の背後から女性の声が聞こえた。

俺は振り返り…固まつた。

そこに居たのは一騎当十の『孫策 伯符』激似の美女。
いや〜…まさかね〜。

「もしかして、『リア』か?」

「はい マスター、お待ちしておりました」

いやいや。ちよつと待とうかセニヨールてえ事は何か? 俺はこれから彼女とずっと一緒に事かい? わふー!!

「私も居るのですが、お忘れですか殿？」

「俺の耳元から声が聞こえた。てか、耳から？」

「もしかして、このピアスは『ナハト』か？」

俺は耳朵に付いたクロスのピアスを触りながら聞いた。

「はい。私は貴方のインテリジェントデバイスの『ナハト』です、
お見知りおきお」

「お～！何か、ナハトかけ～！～こ～つ、将軍に仕える侍を勝手
にイメージしちまつたぞ。

：：：だけどそれって、あの戦闘狂バトルマニアと同じ思春期で事無いよな？

「といひで、リアここにがどこだかわかる？」

「はい、ここは地球の海鳴市ですよ。

因みに、現在の時刻は14：33ですマスター」

「成る程。んじゃ、取り合えず家に帰つて、今後の計画を練るとす
か」

と言つて歩き出さうとしたとき、俺はあることに気が付いてリアと
ナハトに尋ねた。

「なあ、お前等さ俺の家が何処だかわかる？」

「まあ？」

「存じ上げませんな」

ヒューハ～。

いや、マジで困った。何かいい方法は無いものか。

取り合えず、ここに居ても仕方がないので移動。
しかし、宛があるわけでもないので只今放浪中。

いやはや、どおすつかな～。

? ? ? s . t d o

「海美市にて巨大な魔力反応を感じ。

います？」

艦長、いかがなさ

「それ、

さんと

執務幹に向かつてもらいましょう」

「わかりました。つて、聞いてた？　君

ちゃん」

「「はい」」

「じゃ、宜しくね」

? ? ? s . i d o a u t

龍斗 s . i d o

「いやー、マジドビつかなかなー」

宛もなく歩いてやつて来たのは海。

取り合えず、体育座りして海でも眺めるか。

「マスター、お氣を確かに」

「殿、我等の力量不足面田ない」

リアとナハトが何やら落ち込んでる様子だ。
いや、アテナに生活に関する事何も言わなかつた俺が悪いんだけど
どじね。

「いや、お前等は悪くないよ。

しかし、どうしよう。流石にこの容姿じゃ部屋借りるのもバイトするのも無理だしなー」

因みに今の俺の容姿は10歳前後。

流石にこの見た目では日本の法律上無理があるよなー

「さて、悩んでも仕方が無いんだけど、お客が来たみたいだな

俺はそりゃ立ち上がった。

「リア、お前は俺のポケットの中にいる。
手の内は成るべく出さずにつきたい」

「わかりました、マスター」

「ナハト、相手の出方を待つてから、仕掛けるぞ」

「御意」

そして、俺の前に転移して来たのは…

つて、ありやクロノとフロイト? なんである二人が現れるかね?
取り合えず、驚いとくか? 飛んでるし。

「人が飛んでるよ。手品か何かか?」
と、俺が惚けていると。

「ふむ。君は魔導師を見るのは初めてかい?」

な~んて、システムが聞いてきた。

フェイト siido

「ふむ。君は魔導師を見るのは初めてかい？」

クロノは警戒を解いて彼に話しかけた。

私はまだバルディッシュュを彼に向けて構えている。

(バルディッシュュ、どお思ひへ・)

(彼がロストロギアの不正所持者で有ることは、アースラのセンサーで確認済みです。となれば、彼は何かしら隠していると思われます)

(うふ。そあなんだけど、何だか変わった感じの子だなって)

彼は私と同じ位の歳に見える。

でも、何だか近寄りがたい雰囲気を醸し出している。

クロノも何かを感じたから、いつものチョット高圧的な感じではなく普通に話しかけたのかな？

フェイト siido aut

龍斗 Sido

「魔導師…ね。

で、その魔導師さんが俺に何のようだ?」

（ま、何となく予想はついてるけどな。俺の魔力とリア、ナハトに気付いたってどこか？
にしても、一番面倒なのに引っ掛けたな）。これなら、魔王かはやてんに接触しとくんだった）

何て事を考えていると、KYOが何か言つてきた。

「君が持つているロストロギアをこちらに渡してもらいたい。
それは本来、君のような一般人が持つものでは無いんだよ」

「一般人ね～。なら、俺に勝てたら持つてきな。
ナハト、セット・アップ！！」

俺は右耳のピアス（クロスのみ）を外し叫んだ。

そして、まばゆい光に包まれて現れた俺の姿はメサイア（顔や間接部以外）そのものだった。

「うほ マジでメサイアじやん。バルキリーの癖にこの重装甲にウイングゼロの翼。か～、萌え…もとい、燃えるねえ～」

俺は右手に持つた、58mmガトリングポットの銃口をクロノに向

ける。

左腕には15寸の斬艦刀もといナハトを持つて担いでいる。

「やはり、君も魔導師だったか！…なら、話は早い口ストロギア不法所持及び公務執行妨害で君を逮捕する！…！」

（ておい！…クロノ微妙に交戦的だぞ。こんな奴だったっけ？）

クロノもS2Hを俺に向ける。

フェイトもバルディッシュを構え直した。

俺は内心この状況を楽しんでいた。

（こやはや、俺は一体この後どうなるのかね？）

（マスター、楽しそうですね）

（殿は戦闘狂の氣があるやもしれんな）

はてさて、今後の展開はいかに

海鳴市に降り立つも、今後の計画がない事に気が付いた今日の頃（後書き）

さて、次回はフェイト&クロノ・vs Mr・チート。

ここから物語は動き出しますーー。

では、次回もお楽しみに～

戦闘？そんなもんフルボッコに決まってるじゃーー（前書き）

初の戦闘です。読みにくいかもしだせんが、宜しければ読んでやつてください。

では、始まります

戦闘？そんなもんフルボッコに決まってるじゃーー！

俺は、ガトリングポットをクロノに向け連射していた。

「けつ！…監理局の魔導師ってのは、防戦一方の腰抜けか？
そんなんで、俺を捕まえられると思ってんのかよ…！」

クロノは障壁を張り俺の攻撃を防いでいる。

俺はスラスターを使い左右に小刻みに軌道を変えながら、クロノに攻撃の隙を与えなかつた。

(ま、フェイトが挟撃してくるはず)

と、クロノの後方に待機していたフェイトが俺の右翼に回り込み仕掛けってきた。

「フォトン・ランサー！！」

そうフェイトが叫ぶと、10本程の雷の矢が出現し俺に向かってきた。

俺はそれを脳内でロックオン（イメージ）して、叫んだ。

「マルチミサイル、ファイアーノ！」

その瞬間、俺の両肩や胸、両足のアーマーが開き無数のミサイルを吐き出した。

フェイト side

「マルチミサイル、ファイアーーー！」

彼がそう叫ぶと、彼の全身から無数のミサイルが発射される。私は、それを上昇して避けようとした。

(何て数なの？フォトン・ランサーじゃ、半分も防げない)

私は、これが質量兵器出はないのがせめてもの救いだと思った。実際、これ程の火薬が爆発すればいくら海上とは言え、被害が出ないとも限らない。

(結界は張ってるけど、でも安心できないもんね……?)

と、交わしたと思っていたミサイルが上昇して私を追尾してきた。

(誘導タイプ！？だめ、追い付かる……)

未だ、クロノは彼の猛攻から抜け出すことができずにいた。

フェイト side out

俺はクロノへの攻撃の手を緩めること無く、フェイトへと向かつたミサイル群を目で追っていた。

（やつべ～。あれじや、フェイト追い付かれんな。障壁張つても、動けなくなつて手詰まりになるだけだろ？しあや～ね、自分でやつたんだけ助けるか。実際、一人とも弱すぎて興ざめしちまつたし）

俺はそう思つと、直ぐ様フェイトを追つて上昇。

フェイトとミサイルの間に割つて入つた。
そして、ガトリングポットをフルオートで発射。
（にしても、流石高起動型だな。むつきの位置からここまで、軽く
150m位あんのに一瞬かよ）

と、俺がそんな事を考えていると自分で発射したミサイル（約50発）は消滅していた。

「あ～… やめやめ。お前等はつきり言つて弱いし遅せえし、戦つても楽しくねえや。
取り合えず、任意での事情聴取位は付き合つてやるからそれで手え打つてくれ」

フェイト side

私は、ミサイル群に追い付かれると思い障壁を張りついた。

と、私の前に突然人影が。

すると、追ってきたミサイルがその人影の放つ魔力弾によって、次々に撃ち落とされて行く。

一方は正面から相殺、また一方は軌道を変え回避しようとしたけど、追い付かれて爆散。

（え？ 何で彼が？

だつて彼は今、クロノと…）

と、クロノの方を見るとそこには彼は居らずキヨロキヨロと辺りを見回しているクロノのがいた。と、彼が私に背を向けたまま言った。

「あ……やめやめ。お前等はつきり言って弱いし遅せえし、戦つても楽しくねえや。

取り合えず、任意での事情聴取位は付き合つてやるからそれで手え打つてくれ」

と、実際に彼は私よりも早い。でも、弱いって言われるのには納得いかない。

クロノもさう思つたらしく、彼に向かつて叫んだ。

「確かに、君は早いかも知れないがそれだけだ！！
これなら、動けないだろ！！」

クロノはいつの間にか、彼にバインドを掛けていた。
これで形勢逆転。私はそう思った……でも。

フェイツ side out

龍斗 side

クロノが、俺の方を見て叫んだと思つたら両手両足にバインドを掛けってきた。

(おいおい、んな卑怯事やつちまつて良いのか?)

俺は、別に慌てるでもなく考えた。それは、バインドを解く方法。チートのお陰で、俺は様々な魔法を考えるだけで仕える。
いや~、自分で考えるつて面倒だけど仕方ないか。
(いや、無理矢理引きちぎりや良いか)

と、俺は魔力を放ちながらバインドを無理矢理引きちぎった。

「おじおじ言つただり?お前等じや、俺には勝てねえよ。
そもそも、ぶつ倒すのがお前等の目的か?」

俺は少し殺氣を込めて言い放つた。

後ろにいるフエイトが、ビクッとなつた気がするがここは無視だ。
クロノも多少怖じ気付いたのか、一歩引いたように見えた。

「それに、俺帰る場所無くて困つてんだよ。

保護してくれるってんなら、そっちの要望も聞いてやつから。
どおだ?別に悪い取引じゃねえと思つただけど?」

俺がそう言つと、クロノは何か考へてる様子だ。

ま、俺も急にんな事言われても『はい、そりですか』ってなるとも
思わねえけどな。

(ま、これがダメだつたら速攻逃げるぞナハト)

(心得た。しかし殿、何故ゆえに全力での戦闘を避けただけで無く、
あのオナノを助けたのです)

(ん?あ~…やっぱ、女に手え上げんのは抵抗あるんだよ)

(マスターは優しいのですね)

と、俺がナハト達と念話をしてゐるクロノが。

「わかった。実際、君には色々と話を聞きたい。

僕たちと一緒に来てもらひ

「

あらま、案外あつさりと話が進んじまつた。

「都合主義？当然！！

「お～け～。んじゃ、案内宜しくな。

え～っと、名前教えて貰つても良いか？」

知つてゐるけどね！！

「ああ。僕はクロノ・ハラオウン。

で、君の後ろにいる彼女が…」

「フェイト・テスターッサ」

「クロノにフェイトか。俺は高峰 龍斗だ、一応よろしくな」と、簡単な自己紹介を済ませ俺たちは転移した。

時空管理局が保有する戦艦『アースラ』へと

この時、俺は気付いていなかつたが今が『闇の書』の事件が発生する一週間前であつたらしい。

いや～、アテナが言つていた『A S-』の辺りつて、全然初っぱなからかよ…！

この出会いが、俺達の長く険しい戦いの日々の始まりだった。

後に、ハーレムの始まりとも誰かが語っていたが気にしない！！

戦闘？そんなもんフルボッコに決まってるじゃーー（後書き）

初めまして、作者の『どり』です。

今回、初めて戦闘を書いてみたのですが…難しいです。
自分の実力の無さに、泣きそうです。

ですが、頑張って書いていこうと思こます。

宜しければ、皆様の「」意見・「」感想お待ちしております。

では、次回をお楽しみにーー！

今回、クロノは空氣でした（笑）

人、それを『ご都合主義』と言つ（前書き）

更新遅れて申し訳ありませんでした！！

諸事情により不定期投稿になりますが、可能な限り急ぎますので。

では、「人、それを『ご都合主義』と言つ」

始まります

人、それを『ご都合主義』と言つ

ここは、アースラ艦内の会議室。

今、俺は聴取を取るために待機中。

何でも、上官を呼んでくるとかでクロノがブリッジに向かった。
ともすれば、自然の流れでフェイトと二人きりになるのは必然であると思うわけですよ。はい。

「・・・・・」

ま、フェイトはさつきから無言で俺を見ているのだが、俺の顔なんか見て楽しいかね？

フェイト side

クロノがリングディさんを呼びに行つてゐる間、彼を見ていて欲しいつて言つてきた。

実際、アースラに着いてからの彼は大人しかつた。
最初こそ、キヨロキヨロと辺りを見回していただけど、今は腕を組んで静かに椅子に座つてゐる。

(でも、さつきの戦闘では一度も本気を出さなかつた。
彼の本当の実力つていつたい。)

私は、バルティッシュュをギッシュと握った。

フェイト side out

龍斗 side

にしても、この時期にアースラが地球に来てたのには助かつた。
このまま、野宿か魔王若しくは八神低でご厄介になる事になつたら、
色々と被るところだったな。

(で、俺達はいつまで待つてれば良いんだ?)

俺がそんな事を考えていると、よおやくクロノ&リングディさんにアルフ、エイミィがやって来た。

と、リングディさんが俺の問面へと腰をおろす。
それを確認して、他の三人も座つた。

俺は全員を見回した後に口を開いた。

「んで、俺に聞きたいことってなに？
答えられる範囲でなら、話すよ」

まあ、神様（仮）から転生してこの世界にきました。何て言えない
けどな。

「まずは、自己紹介させて貰うわ。私はリンクティ・ハラオウン。こ
の艦の艦長をしているの。
で、こちらの子が・・・」

「私はエイミィ。クロノ君の執務補佐官よ」

「アタシはアルフ。フェイトの使い魔」

まあ、知ってるけどな。

「俺は高峰 龍斗。

で、こいつが俺のデバイスのナハトと・・・おい、リア出てこい」

「はい。マスター」

俺の胸ポケットに入っていたリアが出てきて、俺の肩に乗る。

因みに俺の今の格好は、白のYシャツに黒のネックのシャツ、裾
の広い黒のジーパンにスニーカーといったラフな格好。

こっちに来た時には、既にこの格好だった。

「で、俺の素性とこいつ等の事が聞きたいってことで良いのか？」

「ええ。話して貰えるかしら？」

と、リンパティイさんが聞いてくれる。

（てか、本当に若いな。これで子持ちつてあり得ん）

そんな事を考えながら、俺はこの世界に来た経緯を話始めた。

「最初に断つておぐが、これから話すことは他言無用でたのむ。
俺としても、まだ全てを把握している訳じゃないんでな。
それと、質問なんかは最後に受けけるから途中で話の腰を折らないで
くれ。」

それから、俺は自分がこことは別の世界から來たこと。
そして、元の世界では既に死んでいるので帰れないこと。

この世界に來たときには既にリアやナハトと契約していたことや、
俺の持つレアスキル『神格』（自らの意思で様々な魔法を産み出せる）や『邪眼』（相手に一分間の悪夢を見せることが出来る）を使
えること。

他にも、驚異的な自己再生能力『ディープ・ブラウン』（頭を潰さ
れない限り、心臓を撃ち抜かれようが死にやしない）や常軌を逸し
た超感覚『ニュータイプ』（言わずもがなの“アノ”力です）等々。
そして、俺の基本的な魔法型式がミッドと近代ベルカとのハイブリ
ッドであることを説明した。

「とまあ。はつきり言って俺もまだ状況を完全に把握している訳じ
やないんで、説明できるのはここまでなんだけどな」

と、俺は一通りの説明を終えた。

(ま、アテナに誤つて殺されてチート能力貰いましたっての言えな
いけどな)

そんな事を考えながら、全員を見回して見たら・・・。

固まつてらつしゃいます。

まあ、当然ですよね~ 僕だつてこんなこと言われたら流石に反応
できないし。

龍斗 side out

フェイト side

正直、驚きです。

彼は私とそんなに歳も変わらないのに、異世界からこの世界に来た
だけではなく本当の自分の居た世界では既に死んでしまったなんて。

(それに、幾つものレアスキルを持つてるなんて・・・)
私は、彼がどんなに辛い人生を歩んできたか考えていた。

すると、彼が・・・。

フュイト side out

リンクティ side

「あ～、それで頼みたいことがあるんですけど・・・良いですか？」

私が今の話を自分なりに整理していると、龍斗君が少し申し訳なさそうに話しかけてきた。

（あ～、じつは仕草は年相応でチョット可愛いかも）

「何かしら？」

「あ～・・・、俺の魔力や身体能力どのくらいなのか、俺自身が把握してないんで調べて貰つても構いませんか？」

「構わないわよ。

エイミィ、お願ひできるかしら？」

「あ、はい。じゃあ龍斗くんだよね？私に付いてきて

「あ、はい」

と、ハイミィは彼を連れて会議室後に入った。
それを見て、私はクロノたちを見回して話しかけた。

リンクティ side out

フュイト side

「チヨット良いかしら？」

リンクティさんが私たちを見て話しかけてきた。

38

「彼の話を聞いて、皆の率直な意見を聞かせてもらひる？」
「僕は、まだ正直信じられない。異世界から転生して現れたなんて、常軌を逸している」

確かに、クロノの言つたことは正しい。でも私は、それとは別の考えを告げた。

「確かにお話の中みたいなことだけ、私は彼が嘘をつこうとは思えません」

「アタシも、フュイトの意見に賛成かな？」

突拍子もない話だけビ、嘘つこむ感じはしなかつたし。

それに、ちょっと可愛いし

「

アルフ、可愛いは関係ないと思つよ。それに、私は格好と思つしー
／＼

「わうね。私としても、彼の話を全面的に信じよつと思つてゐるわ。
そこで提案なんだけど、彼を家で引き取らうと思つた。

それに、彼にはフェイトさんと同じように嘱託魔導師の試験を受け
てもらおうと思つてるわ。

どうかしら?」

え? 彼を引き取る? ジヤ、ジヤあ一緒に暮らす?

(＼＼＼＼＼＼＼＼＼)

「僕としてはあまり贅同出来ないぞ。それ、凄く良いこと思います……！」

い・・・いや、良いと思つ

私は、クロノの言葉を遮るよつて答えた。
だって、彼と一つ屋根の下……ボツ

「アタシはフェイトが良いなら、別に良いよ」

「じあ、決まりね。

戻つてきたら、聞いてみましょつ。彼がそれでも構わなければ、だ
けど」

と、そんな事を話しているとハイハイさんと彼が戻つてきました。

あれ? 何だかエイミィ、呆れてるみたいだけど、元気したんだろ?

フェイト side out

龍斗 side

一通り測定を終わらせて、会議室へと戻ってきた。
で、エイミィが測定結果を報告する。

「え~っと、正直私も自分の目を疑つたんだけど、彼の魔力量は測定不能（EX）。身体能力も高く、動体視力や聴覚、腕力や脚力も常人離れした数値です」

エイミィはそう言いながら、測定結果を全員に見せながら説明した。

（いや、全能力EXって言つたきはするけどまさか、ここまでバグキャラ化するとわな（笑））

てな事を考えると、コンティさんから一緒に暮らさないかつて誘われた。

嘱託魔導師にならないかつておまけ付きで。

「え? 良いんっすか?

俺としては助かるんですけど、でもフェイトとか居るから聞いてく

「私は構わないよーー」・・・謹んでお受け致します

てな訳で、俺はリンクティさん達に拾われただけでなく囑託魔導師の試験まで受けたことになった。

ついでに言えば、フロイトがずっと俺の側にいたくなるよになつた。

何故？

（な～、リア？向でだと思つ～。）

（・・・マスターは、もつ少し女心を理解するべきだと思います）

て言われてもな～。

この日から、リンクティさんが俺の保護者になつた。

養子になる訳ではないので、好きに呼んでくれって言われたけど、まあ普通で良いか。

序でに、フロイトやクロノの練習相手もやる事になつたけど・・・、正直、どうすつかな～（色々な意味で）。

この瞬間、ラバーズ第2号が誕生していたが、龍斗は知る由もなかつた。

人、それを『都合主義』といつ（後書き）

「すみませんでした……」

「本当にな。更新遅えし、原作介入にはまだだし。」

「『めん』」

「いや、俺に謝られても困るけどよ。」

「そうですね。私なんて今回、出番が少なかつたですし」

龍斗 「まあ、後で今後の方針について話し合いつとして、今回もこの作品を読んで下さった皆様に心より感謝を申し上げます」

「今後も精進して参りますので、皆様からの『意見・感想』をお待ちしております」

「次回予告」

「嘱託魔導師に成るべく、試験を受ける俺」

「順調に試験を消化していくのですが」

「最後の最後でお決まりの展開か？」

「次回、『性能は、戦力の決定的な差になるんだよ』」

ナハト 「心して見よ」

龍斗&リア「オチ、取られた！！」

『性能は、戦力の決定的な差になるんだよ』（前書き）

今日は少し長めです。

では、囁託魔導師認定試験。

『性能は、戦力の決定的な差になるんだよ』

始まります

『性能は、戦力の決定的な差になるんだよ』

アースラで保護されて一日後。

俺は今、時空管理局本部にて囁託魔導師としての試験を受けようとしていた。

「しかし、御大層な名前のわりには普通な場所だな。」

「マスターは、一体どのような場所を想像していたのですか？」

俺の肩にちょこっと乗つたリアが訪ねてきた。

因みに今は、リンティさんが受付をしてきてくれている。

俺の側には、ミニサイズのリアと何故か服の裾を掴んで付いてきたフュイトが居る。

へ？何でフュイトも一緒に？

そいつは彼女に聞いてくれ。試験受けにいくんでも輸送してもらおうとしたら、一緒に行くつてついてきたんだから。

フュイト曰く。

「龍斗は始めていく場所だから、私が色々と案内してあげる」

らしいのだが、彼女はこちちについてから、ずっと俺の服の裾を掴んで斜め後ろにいる。

(「れじや、案内も何も無い気がするんだけどな）

俺がそんな事を考えてくると、リンティさんが受付が済んだと教えてくれた。

「うしーーー！ ちよ咬ましちゃますかーーー！」

龍斗 side out

フュイト side

（うーー、何でこんなことしかやったんだるーーーーーー）

私は、龍斗が試験を受けに行くと聞いて一緒に付いてきた。

因みに、リンティさんが龍斗を預かる事になつて、私は龍斗を今まで呼んでいる。

まさか、本当に歳が同じなんて思わなかつた。私より落ち着いて、少し言葉遣いは悪いけど・・・。

「じゃ、これから宜しくなフュイト」

やつぱり、眩しい笑顔で握手してくれた。

その笑顔を見たとき、私の胸が高鳴つたことは秘密です。

龍斗 side

で、何でも試験は筆記、儀式、実技の三つがあるらしい。
俺は、筆記を受ける前に神格を使い脳を「答えを知っている」状態
にした。

簡単に言えばアカシックレコードにアクセスし、これから出される
試験の答えを知ったのだ。
これら、カンニングとか言わない。

で、試験会場に向かう途中にリンティさんが口を開いた。

「『めんなさいね。急に試験を受けて貰うことになってしまって』

「いえ、別に構わんですよ。この世界の知識は一応、持っています
から（アニメの知識とアカシックレコードにアクセスしたからなん
だけどね！）」

「でも勉強もしないで、いきなり試験じゃ不安でしょ？」

「いえ、全然！（キリッ！）」

「す、凄い自信ね・・・」

「まあ、見ててくださいよ。リンクティさんの顔を潰すような」とは
しませんから」

俺はそう言つと、後ろに付いてきているフェイトへと振り返った。

「フェイトもさ、心配しなくて大丈夫だからさ」

「うん、信じてる。頑張ってね！」

少しばにかんで答えてくれたフュイト。
う帶の歸り、ソレをう二二

てなやり取りの後、俺は試験会場に入室していった。

龍斗side out

Furukawa

私は今、リンディさんと一緒に別室から龍斗の試験を見ている。
ここには、リンディさんの親友のレティ・ロウランさんやエイミー
も居る。

「リングディまさかあなたが、もう一人推薦したいって言つてきたときは何事かと思つたけど」

「『I』めんなさいね、無理言つて準備してもらつたりやつて

「別に構わないわ。

その子の件もあるし、貴方の日に間違いはないでしょ

と、レティさんが私の方をチラリと見た。

(そつか、私の時も見ててくれたんだ)

そんな事を思つていると、画面上に龍斗が写し出された。

筆記試験が終わつて、儀式魔法の試験会場に移動したみたい。

「龍斗くん、聞こえる?」

エイミィが、龍斗に通信で話しかける。

「あー、大丈夫。聞こえてるよ」

「じゃあ、ボチボチ始めようか」

「あ、チョイ待つてくれエイミィ。儀式魔法つて、召喚魔法でも構わないのか?」

「へ?別に大丈夫だけど」

「了解。んじや、始めますか」

そう言つて、龍斗は呪文唱え始める。

その姿を見ながら、レティさんが近くのモニターを見ながらリンクティさんに話しかけていた。

「彼、凄いわね地球出身なのに筆記試験、満点よ。
いつたい、どんな子なの？」

「そうね、少し訳ありではあるけど良こそよ。」

「答えになつて無いけど、まつ良いわ。
それにしても、儀式で召喚を選ぶなんて」

私も、龍斗が召喚魔法を使えるなんて知らなかつた。
何を召喚するのかな？

フュイト side out

龍斗 side

儀式魔法の試験で召喚がありつてのは、助かつた。

俺は、二匹の空想上の生き物を思い浮かべて呼び出した。

「我が声を聞き、我が声に答えよ。」

汝、その猛々しくも雄々しき姿を我の前に示せ。

我が名は高峰 龍斗。

我、契約しもの。

汝が名は『ラルーツ』、『アカムトル』、『ラオシャンロン』！

！」

俺がそう叫ぶと、俺の周囲に展開していた三つの魔方陣からルーツ、アカム、ラオの三匹が現れた。

(貴様が我等を呼び寄せたのか?)

ルーツが三匹を代表するかのように、念話で話しかけてきた。てか、念話で話せるんだ。ここつは、楽で良いや。

(ああ。俺がこの世界で、お前達を作り出した。で、俺が喚んだときに力を貸して貰いたい)

(了解した。我等を呼び寄せしは貴様だ、協力しよう)

(サンキュー。アカムとラオも宜しくな)

と、俺が返すとアカムもラオも頷き賛同してくれた。それを確認た俺は、空に向かつて確認を取つてみた。

「お~い、エイミィ。

これで大丈夫か?他にも何かやつた方が良いか?

・・・例えば俺の居る半径50km圏内を、別の次元に繋げるとか?」

「い、いや。大丈夫だよ。
それだけ出来れば十分だから。

じゃあ、次の試験は一時間後に行うから、それまで休憩にしてご飯食べちゃって。会場も、そこでやるから」「

「ん、了解。

て訳だ。お前達、サンキューな。」

(うむ。ではまた呼ぶが良いぞ、我が主よ)

そう言って、ルーツ達は姿を消した。

にしても、ハイミィの奴なんか焦つてたけど、何があったのか？

龍斗 side out

フェイント side

正直、ビックリした。だって、龍斗が龍リヤウを召喚するなんて。
しかも、同時に二匹も。

「凄い・・・」

龍斗、本当に凄すぎる。

制御の難しい龍の同時召喚なんて、しかもそれ以外にも何だか物騒
な事も言つてたし。

「正直、驚いたわね彼にわ

「え、ええ。私もこれ程とは思わなかつたわ

レティさんやリン、リイさんも驚いてる。

ハイハイこいつては、まだ自分のほっぺたつねつてるし。

(あんなに引っ張つて、ハイハイ痛くないのかな?)

でも、気持ちはわかる。

私もまだ、これが現実だなんて思えないし。

と、そんな事を思つてると、龍斗が私に通信で呼び掛けてきた。

「お~い、フハイド。弁当一緒に食わないか? リアが今、取りに行つてんだけど」

「え? あ、うん。

ちょっと待つって。今、行くね」

「おう。じゃあ待つてつかんな」

そう言つと、通信が切れた。

うん。龍斗に色々と聞いてみよう。

私は、龍斗の元へと急いだ。

フェイト side out

龍斗 side

で、俺はリアとフロイトと一緒に弁当を食べっこる。
しかも、この弁当は俺の自信作。

え？ 何でお前が作つてんだつて？

ふつふつふ。料理は俺の趣味！！和・洋・中にデザートとの腕は、
現世でも絶賛されていたのだよ。

んで、今日は試験前にちやちやっと作つておいたのをリアにさしき、
取りに行かせて今に至るとい。

「龍斗、お料理上手なんだね」

「マスター、宜しければ今後、私にさしき教授ください……。」

なんて、フロイトとリアにも好評なようで何よりだ。

「まあ、時間が合えば教えてやるよ」

「それにしても、マスター。さつきのは些か反則じみていたと思つ
のですが」

「ん？…あ～、ルーツ達の事か？

まあ、やるとなならアイツ等ぐらに出でないと張り合ひねえし」

「ですが、『祖龍』に『霸龍』更には『老山龍』ですよ？ これだけ
の古龍種を呼び出すのに使われる魔力量！ 「いや、俺ならそこは問
題無いしな」 ……そうでしたね。マスターの魔力は無限蔵なのを
忘れていました」

てなやり取りをリアとしていると、フェイトが呆れたように俺達を見ていて。

「でも、龍斗。あんまり無理はダメだよ？
次の実技試験だって控えてるんだから」

「大丈夫だつて、フェイトは心配性だな」

そう言って、俺は笑顔でフェイトの頭を撫でてやつた。
すると、みるとみるうちにフェイトの顔が真っ赤になっていく。

「おい、フェイト。大丈夫か？
顔、赤いけど。風邪でも引いたか？」

「う、うん・・・だ、大丈夫だよ。／／／

「そ、うか？辛かつたら言えよ？」

にしても、いきなりビラしたんだ？

そんなこんなで、昼食を終えた俺達は次の試験までダラダラと過ごした。

龍斗 side out

リア side

(マスターは、鈍感過ぎます。」れでは、フロントも苦労する事でしょう)

私は、今のやり取りを見て、少し呆れてしまいました。

リア side out

フロント side

(「へ、龍斗反則だよ。あんな顔されて、頭を撫でられたら嬉しくてドキドキしちゃったーーー）

で、今は食事を終えて龍斗はお腹寝中。

本当は、膝枕とかしてあげたかったんだけど、恥ずかしくて言ひ出せなかった。

今はリアさんと一人で、龍斗の寝顔を見ている

「マスターも、寝ている時は年相応に見えて可愛らしさですね

「うそ。。。リアさんは龍斗の事、どう思こますか？」

「それは、主と/orしてですか？それとも、一人の異性としての認識で

すか？」

「え？…あつ、えつと・・・その・・・」

「ふふ。『冗談です。

フェイトさん、アナタのお聞きになりたいことは理解しています

うう～。案外、リアさんはいろんな意味で手強そう。
美人でスタイルも良いし、それにどこか落ち着いているけど好奇心旺盛な目をしてる。

「私には勿体無い程の方です。実際に私が人間であれば、この方と生涯を共にしたい思っています」

「やつぱり・・・」

「ですが、私はこの方のユニークンデバイス。
この方の子を授かる事が出来ません、ですから今後、マスターに好意を寄せている方がいるのであればその方を、全力で応援しようと考えていきます」

「・・・・

「ですから、頑張つて下さいね。フェイトさん　」

「え？ええ／＼／＼

な、何で気付いたんですか？リアさん？！

「ふふふ。アナタのマスターを覗くときの瞳を見ればわかります。

・・・マスターは気が付いてはいないようですが

「え、あのつ・・・?！」

「大丈夫です。この事は他言無用に致しますので」

う。やっぱリリアさんには勝てない気がしてきた。
でも、私は彼女が応援してくれると黙っててくれたことに少しの勇気
を貰った気がした。

「ありがとうございます！」

「私、頑張ってみます！！」

「はい。頑張ってくださいね」

この時、私達の間に小さな友情が芽生えました。

フェイト side out

龍斗 side

休憩時間も終わり、フェイトも別室で観戦するために移動した。
俺は、ナハトを起動させて試験官が来るのを待っている。
因みに、ナハトのモードは1st『斬艦刀』

「元しても、試験官って誰だろな？」

「やはり、殿も気になりますか？」

「いんや、あんまし。

どうせ、直ぐに終わっちまつと思つこ

「へえー、そいつは大した自信だね」

と、俺の前に転移してきた優男。

見た目は・・・特徴無し。パツ金でやたら、髪をかきあげるのが無性にムカつく。

「僕はジエリード・メサ。

AAAランクの魔導師で、君の実戦訓練の試験官さ

うわー、こいつ何かムカつくからフルボッコ決定
ん？待てよ・・・。

「あんた今、AAAランクって言つたか？」

「当然。君のような魔法レベルの低い世界から来た受験生には勿体無いくらーや」

「へー。んじゃ、全力で行つて良いのか？」

「フッ。君は口の聞き方を覚えるべきだね。
ま、低脳な種らじく思えるが」

うん。ここつ、全力で潰そ

「んじゃ、時間も勿体無いんで始めましょう」

「ああ、構わないよ」

俺はその言葉を聞くや否や、ガトリングポットを乱射しつつ上昇。相手が障壁を張ったのを確認して、更に背中のレーザー砲からも収束型の砲撃も追加する。

時間にして、五分ほど砲撃の嵐を浴びせてやったところで一度手を休めた。

すると・・・。

「あ、君は非常識にも程があるー！
いつたい何処に、試合開始直後にこれだけの砲撃をしてくる魔導師
がいるー！」

「！」

それに、アンタでも十分に防げるよう、B+位の威力で貫通効果も排除してやつたんだから、感謝してくれよ？」

「君は一体、何様だー！？」

そう叫ぶとゾーリド（笑）は、無数の誘導タイプの魔力弾を放ってきた。

俺はそれを瞬時にロックし全身のアーマーを開いた。

「マルチミニサイル全弾発射ー！」

それからは激しい魔力弾 vs マルチミサイルの応酬となつた。

まあ、俺がミサイルだけで相手してやつてるから良い勝負に見えるけど、実際にガトリングポットやナハト本体を使つたら一瞬で勝負が付く。

「ぐつ……」この僕が、エリートである僕が、こんな一般人に負ける筈がない！！

お～お～、頑張るね～。

（ナハト、そろそろ決めるぞ）

（承知！）

俺はミサイルの発射を止め、奴の攻撃を正面から受けた。

龍斗 side out

A ll side

ドゴオオオオ～～

「フツ……ふははははっ！！やはり貴様じや僕には勝てないのぞ……」

ジェリードは尙も執拗に攻撃を加えている。

彼はミッド式の魔法を主体としているため、砲撃系の魔法を数多く扱う。今も、誘導・直射・高速誘導・高速直射などの砲撃を加えている。

端から見れば、リンチ以外の何者でもない。

「ふはははは……」れで最後だ！！

そう叫ぶと、彼のデバイス（杖状）の先端へと魔力が集束していく。・・。

「消し飛べ！！

『コズミック・バスター』！！

ドッゴオオオオオ！！

ジェリードの砲撃は、確実に龍斗を捉えた。

辺りには凄まじい衝撃波が発生し、木々を容赦無く揺らした。

誰の目から見ても、やりすぎなのは明らかだったが・・・。

「これで終わりか？」

爆炎の向こう側から、声が聞こえた。

そして晴れて行く煙。

そこには、何事も無かつたかのように龍斗が浮いていた。

掠り傷一つ無く、彼は不敵に笑みを溢していた。

「今のが、アンタの最強だろ？ 威力はAってどーか。んじゃ、俺も一撃くれてやるよ。ちやんと障壁張つとけよ」

そして、龍斗が構えた。

自分の身長の三倍以上ある大剣を片手で振りかぶる。

そこには、何者逃れる」との出来ないであらう殺氣を放つ魔物がいた。

そして

「一律先進、狙いは一つ……！」

そう言つて、加速する。

「斬艦刀、一文字切りいいいい……！」

降り下ろされた刀身からは、凄まじいほどの魔力量の斬撃が放たれる。

ジョリードの張つた障壁等、存在しなかつたかの如くすり抜け。地響きと共に辺り轟音が轟いた。

「我に断てぬもの無し」

その場に残つたのは、龍斗と哀れナハトの先端にぶら下がつたジョリードだけであった。

A 1 1 s i d e o u t

フェイツ side

画面が真っ白になった。

それが晴れると、私はまた自分の目を疑つた。

(今日は一日中、驚いてばかりいる気がしてきた)

龍斗が放った斬撃で、辺りの地形は変形して、巨大なクレーターが出来ていた。

「彼は本当に人間なの?」

レティさんに聞かしては、「こんな発言まで出るほどだ。」

「え、ええ・・・多分」

リンクティさんも自信無むかつて、答えていた。

「あ〜・・・龍斗くん、試験官を医務室まで連れていいてくれる?」

「了解。で、試験の結果は？」

もし不合格なら、この施設消すけど」

え？ええ～？！」

龍斗、それは流石に不味いよ～！！

私は、龍斗ならやりかねないと本当に思った。

「ふ～。大丈夫よ。

貴方ほどの実力者を野放しに出来るほど、今の管理局には人材がそろつては居ないもの」

レティさんが、通信で龍斗に返す。

あ、ちょっと龍斗が驚いた。

「それに、さつきの反応だと直ぐに認定証も準備しうってところかしら？」

「あんた、話が早くて助かるよ。

出来れば、今日明日中で」

「わかったわ。貴方ほどの人材が手に入るのなら、お安い用よ」

「ん。んじゃ、帰るか。

お～い、フェイト。リア。帰るぞ」

そういつて、龍斗は通信で私に呼び掛けてきた。
あれ？リアさんはユニゾンしてるんじゃ？

「はい、マスター」

と、私の後ろから出てきたりアさん（小）。
え？ リアさん、ユーロンしてなかつたんですか？！

「これはまた、とんでもない子が現れたわね」

レティさん、頭押をえてる。

リンディさんもエイミーも苦笑いだし。

龍斗、恐ろしい子

この日、一つの伝説が生まれた。

それは『試験会場を半壊させた男』と言つた。

『性能は、戦力の決定的な差になるんだよ』（後書き）

「いや～、今回は試験とリア&フロイトの友情を描いてみた
ぞ」

「友情は良しとしよう。」

「……」
「何だこの戦闘描写は……！」

「ひまわり！」

「まったく、お前の才能の無さには、ほとほと呆れるぞ」

「全くです。私なんて、未だにユーラン出来ないですし」

「だつてだつて～！！」

「駄々裡ねるなー！キモイは、マジでー。」

「ちつちつと強いからいで、いい気になりやがって」

「アナタが、そのように書いたのでわ？」

龍斗 「あー、リア。相手にすんな。アホが移るぞ」

リア「はい」「

「君たち、俺の事キライだろ？」

龍斗&リア 「「当然」^{です}

「うへ。いいんだどうせ俺なんて……」

龍斗 「どれ、面倒なのが隅でいじける間に次回予告、終わらすか」

リア 「はい」

龍斗 「で、次回の話は？」

リア 「何でも、私達の設定紹介みたいですね」

龍斗 「つまり、逃げたと」

リア 「みたいですね。そろそろ、原作介入しても良いのですが」

龍斗 「まあ、ここつは何故かココでワンクッシュョン置きたいみたいだからな」

リア 「ですね。でも、後でまた色々と辻褄が合わなくなるんですね」

龍斗 「だらうな」

龍斗&リア 「次回『キャラ設定』、自分の中であらわんと組み立ててから書くのが常識だと思ったのに出来ないやつ」

ナハト 「心して見よ」

龍斗&リア 「またか（ですか）？！」

『キャラ設定は、自分の中で何かと組み立ててから書くのが常識だと思った』

今回は、設定紹介です。

一応、細かな詳細等を載せてみました。

では『キャラ設定は、自分の中で何かと組み立ててから書くのが常識だと思ったのに出来なこやつ』

始まります

『キャラ設定は、自分の中であやんと組み立ててから書くのが常識だと思ったの

今回は、A.S.・原作介入直前スペシャル（仮）
あのチート主人公やデバイス達について、現段階で公表できる情報
を載せたいと思います。

どら「因みに司会は、作者こと私『どら』と」

アテナ「プロローグ以降、出番がなかつた神様（仮）『アテナ』で
す」

アテナ「てえ……何でまだ（仮）が着いたままなのよ……」

どら「いや～。その方が最初から読んでいただいてる、読者の皆様
にはウケが良いかな～って」

アテナ「アンタも殺っちゃうわよ」

どら「なら、私の権限で消えますか？」

アテナ「じめんなさい……」

どら「フツ。神様（仮）さえ、『』では私には敵わない……あ～、
優越感」

アテナ（何で、こんなのが作者なのよ。
もっとまともな人間はいなかつたわけ……）

どら「ん? 何か言った?」

アテナ「いえ、別に~」

どう「さて、ここでいつまでもフリートークやつてもしちゃがな
いので、それそろキャラ紹介に行きましょう。」

まずは、この作品のMR・チート主人公の『高峰 龍斗』です。

名前：高峰 龍斗

たかみね
りゅうと

年齢：9歳（作品連載開始時）

身長：152cm

体重：43kg

魔導師ランク：EX（測定不能）

主要魔法形式：ミッドチルダ式を主体とした近代ベルカ式のハイブ
リッド式

デバイス：インテリジェントデバイス『ナハト』（後に詳細記載）

ユニゾンデバイス『リア』（後に詳細記載）

希少能力

レスキル

『神格』…この力は、龍斗が想像（妄想？）した様々な魔法を生み
出す力。

備考

これは、色々なアニメやマンガの能力を「コピー」する事もあれば、完全オリジナルのとんでも技を作り上げることも出来る。

『邪眼』：目を合わせた相手に、一分間の悪夢を見せる事が出来る。

備考

お気付きの方もいるかと思いますが、この力は『Get Back to the』に出てくる能力です。

『ディープ・ブラウン』：常人離れした身体能力や自己再生能力を生み出す細菌です。この細菌を体内に宿す限り、頭を潰されない限り死ぬことはありません。

備考

これは、『Ever 17』と言つ作品に出てくる物を勝手に改良したもののです。

『ニュー・タイプ』：人知を超えた超感覚。四次元的思考能力に長け、第六感としての勘の良さなど、人外の感覚を持つ。

備考

この力は、馴染みの深い方は多いと思います。隕石をガンダムで止めたアノ方や、赤い方などが持つ特殊能力です。

詳細：外見はガンダムWのデュオ・マクスウェル。

本来、死ぬ予定はなかつたのですがアテナ（神様（仮））の手違いにより死んでしまつた、残念な主人公。

現世では吹奏楽部の副部長をしていたり、料理が趣味だつたり、オタクだつたりと何かと統一性の無い人間だつた。

少々、口は悪いが他人を思いやる心をもち、自分のテリトリーに入れた者は全力で守ると誓う熱い心も持つていていたりいなかつたり。この作品では、リリなのA.S.の世界を救うべく扮装する予定です。因みに、ハーレム効果は実はアテナが附加した物で、龍斗自信が望んだ体質ではない。なので、ハーレムルートに突入してもきっと気が付かないだろう。

デバイス非融合時に使用可能な能力（魔法や技）

魔法名：『ヒール』

威力：AA

備考

これは、テイルズシリーズでお馴染みの回復魔法です。
しかし、龍斗の常識外れの魔力を使用することで、その回復量は飛躍的に上がっています。

魔法名：『スター・ダスト・レイ』

威力：AA

備考

本作オリジナルの魔法です。

イメージとしては、フェイントのフォトンランサーを数倍に増やした物です。

技名：『ゴットフィンガー』

威力：S

備考

これは、Gガンダムに登場する『ゴットガンダム』の必殺技です。龍斗の持つ、膨大な気を手に這わせる事により、灼熱とも言える熱を発して敵を粉碎します。

因みに、ガジェット程度であればこれだけでも本来は事足りるとか

⋮。

魔法名：『奇跡の鐘』
きせきのかね

威力：？？？

備考

こちらも、本作オリジナルの魔法。世界の理を外れた、奇跡を起こす。

しかし、いくら企画外の力を持つ龍斗と言えど、この力を使うと相当の付加が掛かり生命危機にすら直面する。

どちら「こうやって見ると、本当にとんでもないキャラだな」

アテナ「だね～。しかも、私の手違いで殺した事になつてゐるけど、何があるんでしょ？」

「べり「ん～…、べりだらね？俺としても、色々と考えてるけどね」

アテナ「まあ、アンタの事だから、また変な事やらかすんでしょ？」
べり「当然！～まあ、話が進めば進むほどカオス化していくと想ひぞ」

アテナ「う～わ～。ぶっちゃけたわね」

べり「……讃めるなよ」

アテナ「讃めてないわよーー！」

べり「あり？」

アテナ「そんな事より、紹介の続き行くわよ」

べり「お～！」

続いては、M・チートの相棒『ナハト』だ

名前：ナハト

種類：インテリジェントデバイス

備考

通常時はクロス型のピアスで、龍斗の左耳に着いている。龍斗とセットアップした際は、マクロスFに登場するVF-25（アーマード装備）のような重装甲・高火力形態となる。

しかし、あくまでバリアジャケットとしての概念を尊重し、関節部のインナーの露出やフェイスガードの廃止など、少々アンバランスなビジュアルとなっている。

さらに、バルキリー特有の変形機構を排除（人の関節があんな変形に、耐えられるか疑問のため）。それにより、バトロイド形態のみを使用する形となる。

ここで、作者の独断と偏見でウイングゼロカスタムの翼を追加することにした。

この翼はシールドの役割もこなし、ディバインバスタークラスであれば防ぐことが可能である。

これは、本作品のタイトルにある『舞い降りし翼』に関連していることは明白である。

さらに、このバリアジャケットにはもう一つ秘密があり、任意でアーマードパックの排除が可能である。

それにより、超高起動戦闘を可能とする。

アーマードパックを排除した際の機動力は40%増となるため、本気を出せば追い付ける者は恐らく皆無であろう。

さらに、作中に登場するガトリングポットは支援AIを搭載していない、ただの魔力制御装置であることが判明。ナハトの本体は、別の形態を取るためにこのような処置が施された。

ナハトデバイスフォーム

1stフォーム：斬艦刀

技名：『斬艦刀・一文字切り』

威力：AAA+

備考

これは、スーパー口ボット大戦に登場する『ダイゼンガー』の武器。身の丈三倍程の大剣で、この形態が最も使用魔力が低い。主に、対艦・対城など大型の目標を接近して破壊する事に特化している。技も、オリジナルをそのまま転用している。

2ndフォーム：ヒートショーテル

技名：『鬼神乱舞』

威力：S

備考

これは、ガンダムWに登場する『ガンダムサンドロック』の武器。独特の形状をした双剣で、魔力放出時には刃が紅く染まるのが特徴。主に、高速戦闘時に使用されるが、本作中では未だその姿を見せていない。

技に関しては、モンハンの鬼神化時の双剣乱舞をイメージしていただければ、幸いです。

3rdフォーム：ツインバスター・ライフル

技名：『ツインバスター』

威力：SS～???

備考

こちらも、ガンダムWに登場する『ウイングガンダムゼロカスタム』の武器。

一本のバスター・ライフルという、極めて強力な兵器。

魔力を圧縮して撃ち出す使用となつていて、魔王の持つスター・ライ

トブレイカーをも凌ぐ優れもの。

しかし、チャージに相当の時間を要する為、連射性は低い。

技の発動イメージも、劇中のゼロカスタム同様と思つていただければと。

4thフォーム：夜刀【月影】

技名：『白雷牙龍』
はくらいがりゆう

威力：SSS？？？

備考

これは、モンハン2Gに登場する太刀『夜刀【月影】』その物です。漆黒の刀身を持ち、野太刀を彷彿とさせる長刀です。技に関してですが、これはシグナムの『紫電一閃』と同系統です。しかし、刀身から放たれる斬撃は白く輝く雷の龍です。

因みに、これらのフォーム以外にも今後様々なバリエーションが登場する予定です。

詳細

ナハト自体は、極めて冷静沈着がモットー。

龍斗を『殿』と呼ぶのも、他のデバイスとの差別化を図るべく採用された。

少々、時代錯誤なしゃべり方をするのが特徴とも言える。

何をあいても、主を第一に考え一歩引いたところから事態を把握しようと努めている。

その為、作中に空氣になることもしばしば…。

「いや～、ナハトの説明長…！」

アテナ「確かにね。アンタが考えた設定だけ、チートビームの話じゃないわね」

「確かに、そんな気がしてきた」

アテナ「それに、ナハトにはまだ進化の予定があるの？」

「ああ。今後の展開次第では、更にバリエーションが生まれる予定だ」

アテナ「…ホントに、色々とブレイクする気ね」

「…自分で、かな～り無茶してるので思えてきた」

アテナ「ま、気を取り直して最後のキャラ紹介しよ」

「そうだな。トリを勤めるのは、本作中で龍斗ラバーズの発起人にして、頼れる皆のお姉さん…！」

「リア嬢だ…！」

名前・リア

種類：ユニゾンデバイス

アウトフレーム時の外見年齢：18歳

スリーサイズ：「ひ、秘密です／＼／＼」

備考

龍斗とユニゾンした際は、主に防御面のサポートに徹する。彼女自身の戦闘能力も高く、龍斗が使用する『スター・ダスト・レイ』や『ヒール』、更には彼女オリジナルの『イージスの盾』と呼ばれる防御壁を使用できる。

魔法名：『イージスの盾』

備考

これは、スーパー・ロボット大戦 外伝に登場したシールド。時空震すら防ぐ代物で、本作中でもそのまま設定をそのまま採用している。

詳細

龍斗のユニゾンデバイスであり、彼の最大の理解者である。外見は一騎当千の『孫策 伯符』をイメージ。落ち着いて、常に仲間達を気に掛けている。龍斗を第一に考え、龍斗の為であれば何でもこなしてしまつ正に最強の彼女（仮）。

しかし、自分がデバイスであると言つ理由から、龍斗を幸せに出来るのは自分ではなく人間なのだとと思っている。

そんな彼女は、龍斗の前に次々と現れる女性達を応援する事を、今

の世界観の作りに感じられる。こ

アテナ「・・・ナハトと比べると、かなり短いわね」

「おおきな」

アテナ「で……アンタはどこのゲンジウよ……。」

ゴス！！

卷之三

アテナ「まったく。遊んでないで、リアちゃんの設定が短かつた理由は？」

「いや、龍斗が最強過ぎだろ？お陰で、ユーランあんまり味無いなって」

アテナ「うわ、酷い！！アンタね、リアちゃんが可哀想でしょ！」

「いや、俺もそう思ったから、新しい立ち位置を作ったんだよ」

アテナ「それが、『皆の頼れる、お姉さん』? それにしては、インパクトが薄いんじゃない?」

「いやいや。」これから本編に入ると、それが映えるんだよ」

アテナ「例えば？」

どり「詳細は言えないけど、リインフォース助ける時や、助け出した後に大活躍！…」

アテナ「て事は、物語の後半に鍵になると？」

どり「ま、そんなとこだ」

アテナ「ふ～ん。まあ、それなら私も大人しく観戦させて貰うわ」

どり「え？お前にも後で出てもいいつよ～」

アテナ「はあ？…ひょっと、聞いてないわよー…」

どり「だって言つてなかつたし」

アテナ「い、いこつ～！…」

どり「まあ、楽しみに待つてなさい。かなり美味しい役回りあげるから」

アテナ「本当でしきうね。もし、出さなかつたらただじゃおかないわよ」

どり「おう。そこは安心してくれ」

アテナ「わかつたわ。で、そろそろ時間みたいよ」

どり「お？…本当だ。いや～、長々としてたな～」

アテナ「まつたくよ。私なんて、久々の登場だつたのに説明無しだ
し」

ビラ「だつて、説明する事無いもん」

アテナ「はあ～。まあアンタだし期待してないわよ」

ビラ「そんなに誉めるなーーー(テレテレ)」

アテナ「誉めてなーい!!」

ビラ「マジでーーー。」

アテナ「ヤレで驚くアンタを尊敬するわ」

ビラ「では畠さん、長々とした設定紹介を読んでくださつて、あり
がとうございました」

アテナ「後書きで次回予告があるので、直しければそちらもお読み
ください」

ビラ&アテナ「では、まつたね～」

『キャラ設定は、自分の中でひやかと組み立ててから書くのが常識だと思ったの

「いやー、今回は私も登場出来て良かつた」

龍斗「俺達は、そつこは出て無かつたな」

「うん。だって、出てあたら色々と文句つけたら?」

龍斗「当然だ!…そもそも、お前の独壇場つてのが氣に食わん」

リア「やつですね。私の紹介なんて、マスター やナハトと比べて、すつしつつ少なかつたですし」

「いや、だって……ねえ?」

龍斗「俺に同意を求められても困るだ」

「はい」

リア「でも、アテナさんとのお話の中でも、私が後半の鍵になるって仰っていましたよね?」

「ん? そだよ。物語の後半で大活躍して貰う予定」

リア「なら、良しです」

龍斗「ちつーーーリアを褒めしゃがつたか

「そんな、人聞きの悪いこと言つなよー

龍斗「ええい、鬱陶しい……ナハト……」

ナハト「セットアップ」

どら「え？！」

龍斗「ううフォーム！ 消え去れえ！……」

どり「ギヤアアアア……」

龍斗「ふう。悪は滅びたか

リア「あ、悪つて……」

龍斗「良いんだよ、あんな奴

リア「は、はあ」

龍斗「それでは、作者不在の為、この場を借りて俺達から、今回の話を読んでくださった全ての皆様へ

龍斗&アンド・リア「心よりの感謝を申し上げます」

龍斗「さて、次回予告やるか

リア「はい」

龍斗「囑託魔導師としての初任務に赴く俺達

リア「それは、彼がこの世界での初めての介入行動」

龍斗「俺が目指すのは、皆が笑つて過ぐせる未来」

龍斗&リア「次回『原作ブレイク警報発令！』『はじまりは突然になの』に介入せよ！』

ナハト「心して見よ！』

龍斗&リア「『またかよ！』（ですか！）』

『原作ブレイク警報発令！！「はじまりは突然になの」に介入せよ！』（前書き）

まさかの連投です（笑）。

今回は、アノ名言が聴けるかもしません！！

では『原作ブレイク警報発令！！「はじまりは突然になの」に介入せよ！！』

始まります

『原作ブレイク警報発令…! はじめは突然になの、に介入せよ…。』

12月3日

俺は、アースラ御一行と共に海鳴市近郊（時空間内）へと来ていた。その理由は、第一級ロストロギア通称『闇の書』の反応が最近、この付近で確認されたとの報告を受けたからである。

俺は、先の嘱託魔導師認定試験に合格し、晴れて魔導師としてアースラに乗船している。

「それにして、あのレティさんが俺を見逃したな」

俺は今、ブリッジでコンソールを操作しながら近くに居たエイミーに声を掛けた。

「まあ、本当は自分の管轄に入れたかったみたいだけど、艦長が『この子も、私が面倒を見るから』って言つたらしいよ」

「確かに、今の俺の身元保証人はリンクティさんだけや。それで、良く折れたよな」

「ん~。確か、フヨイトちゃんも一緒にお願ひしたつて聞いたよ?」

「は? 何でフヨイトが?」

「一緒に居たかったんじゃないの~? (ニヤニヤ)」

「? 何でだ? 別に、俺が居なくても、クロノやリンクティさんにエイミイだつているだろ?」

「いや、やつじやなくてね」

「？意味がわからんねえよ」

俺は、そんな会話をしつつも周囲に異常な魔力反応が無いかチェックしていた。

龍斗 side out

H.I.I.Y side

駄目だ。基本的に勘が鋭いのに、いつ言つた事に関してはクロノ君以上に鈍感みたい。

(「いや、フロイトちゃんも苦労しそうね）

見ると、龍斗君の側で作業していたリア（アウトフレーム）も溜め息ついてるし。

そして、田があつた私たちは、同時に苦笑してしまった。

(ホント、みんな苦労しそうね)

リンクティ艦長や他のクルー達も、どこか温かな田で苦笑している事に龍斗君は気が付いて無かつた。

ハイ//ハイ side out

龍斗 side

で、俺がやリアが何故アースラのブリッジコンソールを扱えるかと言つと。

「龍斗くんもリアさんも、情報処理能力がすば抜けて高いのよ。アースラに乗っている間だけでも良いから、手を貸して貰えないかしら?」

と、リングティさんに頼まれたので、俺達は一つ返事で了承したのだ。

(まあ、俺としても願つたりだけな。これで、上層部がやりがやってる事の尻尾を掴みやすくなる)

俺が目指すのは、首が笑つて過ごせる未来。
その為には、管理局の膽を出しきるのも俺の目標の一いつでもある。
俺は、仕事の合間に縫つて情報を集めるよつ、リアにも指示していく。

た。

「マスターの『』指示でしたら、私はその為に全力を尽くします

そつ語つてくれた時の、リアの表情がとても綺麗だと思つたのは内緒だ。

そんな事を考えていると、俺はのモニター上のある変化に気が付く。

時刻は06:35。

場所は海鳴市 桜台。

確か、魔王が朝練してるんだっけか？

にしても、こんな朝早くから起くやるよ。

「あのや、ハイミィ。この魔力反応は？」

俺は知っているが、一応確認を取つた。この段階では、俺は面識がないからな。

「ん～？あ、その反応は『なのは』ちゃんね」

「なのは？」

「そ。高町 なのはちゃん。

前の事件の時に、協力してくれた子よ。龍斗くんやフロイトちゃん
と同い年の可愛い子よ」

「ま、可愛いのは置いといて。この反応値の高さが気になるな」

「ん？何で？」

「今回の事件は、十中八九『闇の書』の完成が目的だと思つからな。
これだけ高い魔力なら、目を付けられても不思議はない。彼女の周
囲にも少し、警戒しておくれべきか」

俺はそう言つて、コンソールを弾いた。

高町なのはの情報が、俺の前のウインドウに表示される。

(若干9歳にして、AAAランク魔導師。本当にことでもないな)

俺は、そのデータをリアの所にも送った。

「一応、護衛対象として認識しておいてくれ。
狙われる可能性が、高いからな」

「はい。マスター」

リアも、俺の意見に賛同なのか直ぐに、そのデータを閲覧する。

「それにしても、本当に龍斗くんって凄いよね～」

と、ハイミヤがじつちを見て、言に出した。

「ん? 何がだ?」

「いや、いつもお仕事手伝ってくれたり、フェイトちゃんの訓
練に付き合つたり、3時のおやつにはお菓子作つてくれたり。
本当に何でも出来るんだな～って」

「別に、特別なことなんてしていないだろ?」

俺は、自分に出来ることをこなしてるだけだし

「その、何でもない」とを平然と出来るのが凄いんだって。しかも、
まだ9歳だよ」

「あ～・・・、言われてみれば、確かに

(いや、実際は18+ だけどな)

俺はそんな事を考えながら、朝の勤務に勤めていた。

アースラ一室

それから数時間後。

只今、絶賛ティータイム中。

本日のお菓子は、オーソドックスにクッキーとマカロン。

それぞれ、数種類作つてあるので飽きは来ないだろ。

因みに、ここには俺が宛がわれている部屋で、そこにはフェイトニアルフ、コーノやクロノにエイミィとコンディさん・リアがいる。

それぞれ、思い思いに午後の一時を満喫している様子。

「それにしても、龍斗の作れるお菓子、美味しいね

そう言って、フェイトがクッキーをハムハムしている。やつべー、
マジかわゆす！！

「本当に。どれも、甘過ぎずそれと重って味気無くなじむ、絶妙の味加減」

リンティヤセモ、わざわざから手が止まつてない気がする。

「ですよね～ 私には到底無理だな～」

「ハイハイも、幸せそうな顔して食べてるし。

「アタシとしては、もつもつと甘くても良こと思ひナビね
アルフ、お前は食い過ぎだ。まあ、大量に焼いといったから問題は無いけどな。

「それにしても、僕達まで駆走になつてよかつたのか？」

「ん？別に気にするな。俺が好きでやつてることだしな。それよりゴー、紅茶のお代わりいるか？」

「うふ。頼むよ」

「ん。クロノは？」

わざわざから、無言で書類を見ながらクッキーをかじつてるクロノにも声をかける。

「ああ、頼むよ」

「おっ」

俺はそう答えると、部屋に備え付けたある簡易キッチンへと向かった。

龍斗 side out

フュイト side

「ねえねえ、リア」

アルフがリアに話しかけている。

「何でしょ、うか？」

「アンタのマスターって、何でも作れんの？」

「料理ですか？…うですね、恐らく作れないものは無い筈ですよ」

「えつ？…うなの？」

あ、ハイミィも参加した。

「はい。一度、マスターにレパートリーを聞いてみたのですが、その数が豊富で恐らく私達の知っている料理であるば何でも作れるみたいですね」

「へ～。あの歳で、魔導師やつたり料理出来たり運動神経良かつた
り。本当に人間？」

「あ、アルフ！…」

「お、アルフったら何て事を言ひ出すの…！」

「ふふ。大丈夫ですよフュイトさん。マスターにじつて、今の言葉
は最高の讃め言葉ですから」

「…」「え？」「…」「…」

クロノを除いた全員が、リアさんの言葉に反応した。

「マスターは、自分といつ存在を、どんな認識であれ認めて貰えれば、それが励みになると言つていきました」

それって、どいつ言つ事だろ？

私は、リアさんが言つてこたことについて考えていた。
でも、今の私にはその答えを知ることは出来なかつた

フュイトside out

で、俺が紅茶を持つてみると、そこは何だか静かに思えた。

「へ・ビうしたよ。何かあったのか？」

俺はクロノとユーノに新しい紅茶を渡し、席に着きながら聞いてみた。

「いえ、マスターは料理がお上手だと話していたんですね」

リアが俺の問いに、即座に返してきた。

「? なら別に良いけどな」

俺はそう言って、クッキーを摘まもうとして、ふと気が付いた。

「フエイト、口元にジャムつけてるぞ」

「え？」

俺は、そう言ってフエイトの口元に着いたジャムを人差し指でくい取り舐めた。クッキーに付けたジャムが着いたのか。

龍斗 side out

(はい／＼)

私は顔から火が出そうな程に、赤くなつていくのを感じていた。
だって、何の前触れもなく龍斗にあんな事されたら。

(／＼／＼／＼)

思い出しただけでも、恥ずかしいのと嬉しいので、頭がいっぱい
いっぱいになつた。

「りゅ 龍斗！君は何をしてるんだ！！」

クロノが龍斗に向かつて、怒つてる（？）みたい。
エイミィやリンディさんは『きやー』って言つてるし。
ユーノやアルフもポカンとしちやつてる。
リアさんは、私に向かつてGって親指立ててるし。

「ん？別に、何か問題あつたか？」

龍斗は何で皆が騒いでるかわかつてないみたい。
実は、天然なのかな？

でも、嬉しいから良いか

フェイト side out

リア side

マスター、流石です。

いつも自然に乙女心を驚掴みにするとは。

(マスター、恐ろしい子)

私は、改めてマスターが大物だと確信しました。

リア side out

そんな午後の一時を満喫(?)したのち、俺はまたブリッジで周囲の確認を行っていた。時刻は19:45。

(そもそも、ヴィータがなのはと接触する頃か)

と、突然アースラ内に警報が鳴り響いた。

俺はコンソールを操作しながら、状況の確認した。

海鳴市中心部に広域結界の展開を確認。ヴィータがなのはとの戦闘を開始したようだ。

「何があった！？」

クロノがフェイトやアルフ、ユーノを連れて俺に訪ねてくる。

「海鳴市に広域結界の展開を確認した。その際に、高町 なのはだつたか？そいつが結界内に閉じ込められたのも確認している」

「なのはが？！」

フェイトが驚いているが、俺は構わず説明を続けた。

「恐らく、ここ最近のリンクアーコアを狙った襲撃者の仕業だらう。俺はこれから、結界内に転移して彼女の救出に向かおうと思つ」

「わかつた、僕達も行こう。君一人でも構わないだろうが、彼女は僕達の友人だ。このまま放つておくことは出来ない」

クロノがそう言つと、ユーノとアルフも同意した。
そして・・・。

「なのはは、私が助ける」

フェイトはどこが決意にを込めた瞳で、俺を見上げていた。

「良し。リンクティさん、構いませぬよな」

既に、アースラのブリッジクルーは全員、配置についている。俺は

艦長席のソンティさんを見上げて、確認を取った。

「ええ。

もし、龍斗君の推測が正しければ、事態は急を要します。気を付けてね」

「はい。それと、転移装置までの移動時間が勿体ないので、ここから飛びます」

俺はそう言つと、ナハトをセットアップし神格を発動。フェイントやクロノもセットアップした。

「座標は海鳴市中心部。高町 なのはの魔力サーチ。サーチ完了。座標固定、魔力量増大、空間転移！！」

俺が叫ぶと、周囲に現れた青色の光に包まれて、転移した。

龍斗 side out

なのは side

私は、突然現れた赤い女の子の襲撃を受けて、絶体絶命のピンチにひんしています。

既に、全身ボロボロで動くことも出来ない。目も霞んできた。

(「なんので終り?」)

私は、ボロボロのレイジングハートを彼女に向けてる。
彼女は、大きなハンマー型のデバイスを、振り上げている。それが、
降り下ろされれば、多分わたしは・・・。

(嫌だ。ユーノくん、クロノくん、フェイトちゃんーーー)

私は心中で、そう叫び目をギュウッと瞑つた。

ガキン!!

何かがぶつかる音がして、私は目を開いた。
そこには、私の大親友と機械の天使を彷彿とさせる、少年が立っていた。

なのは side out

龍斗 side

ヴィータのグラーファイゼンをフェイトがバルディッシュで受け止める。俺は、フェイトの隣に立ちガトリングポットをヴィータに向けている。

「「めん、なのは。遅くなつた」

ユーノがなのはの隣に行き、肩に手を掛けている。なのはは、何が起こったかわかつていはない様子。

「ユーノくん……」

なのはが呟いた。

さて、俺はヴィータに視線を戻した。

ヴィータはフェイトに少し押され気味である。

「仲間か！？」

ヴィータは少しイラついている様子で、そう言つと距離を取るために後方へと飛んだ。

フェイトはバルディッシュュをザンバーフォームにして、一言。小さく、しかし力強く言つた。

「友達だ」

そう言つて、バルディッシュュを構える。

「いいえ、『闇の書』を巡る戦いが幕を開けた。

『原作ブレイク警報発令……「はじまりは突然にな」に介入せよ……』（後書き）

「……免なせ……」

龍斗「よ～し、言い訳は署で聽こうか？」

「……だつて、いつ書いたネタ書きたがったんだもん」

龍斗「だもんじゃねえ……」

リア「まあまあ、マスターも落ち着いて下さい」

龍斗「これが、落ち着けるか……フュイトファンに刺し殺されるやうだ！」

「……」

「……それも、面白そうだな」

リア「仕方ありませんよ。マスターは、『歩く天然フラグ製造機』でもあるんですから」

龍斗「リア、俺に怨みもあるのか？」

リア「いえ、全然」

龍斗「おい、作者。リアが壊れかけてないか？」

「……キノセイダヨ」

龍斗「何で片言？！」

リア「はー。おふやけなー」今までです。読者の皆様への「」挨拶しますよ

龍斗&あみ・どり（最初に話をややこしくしたのは、誰だよーー。）

リア「?何か言いましたか（＝コラ）」

龍斗&あみ・どり「こえ、何もーー。」

どり「では、気を取り直して」

どり&龍斗&あみ・コア「「「今回も」」愛読頂いた全ての読者の皆様に、心よりの感謝を申し上げます」「」

リア「もし宜しければ、皆様からの「」意見・「」感想をビジョビジョ待ちしております」

龍斗「つきましては、誹謗・中傷に關しましてはお控え頂くよう」「理解の程、宜しくお願い致します」

どり「では、次回予告どり」

龍斗「傷付いたなのはトレイジングバーー」

リア「私達は、この状況を打破するべく戦います」

どり「そして、新たに立つフラグ（笑）」

龍斗「・・・」

リア「様々な思いを乗せ、純白の翼は羽ばたく」

龍斗&リア「次回『『戦いの嵐、ふたたびなの』』って戦わ
なかつたら、この作品成立しないたろ?と思つたのは私だけ?』

ナハト「心して見よ!..!」

龍斗「さあ、貴様の罪を数えろ」

どひ「ギヤアアアアア!..!」

『「戦いの嵐、ふたたびなの」って戦わなかつたら、この作品成立しないたろ』

今回は、少し長いです。

本当は、前後編にしようかと思ったのですが、一気に書き上げてみました。

それでは『「戦いの嵐、ふたたびなの」って戦わなかつたら、この作品成立しないたろ？と思つたのは私だけ？』

始まります

『「戦いの風、ふたたびなの」って戦わなかつたら、この作品成立しないたろ』

さて、ヴォルケンリッターとの初の顔合わせ……もとい戦闘何だが、どおつかね。

(リア、お前はなのはに付いてやれ)

(はい。マスター)

俺の肩に乗っていたリアがアウトフレームとなり、なのはの傍らに降り立つた。

「え？え？・・・あの？」

「大丈夫だよなのは。この人は味方だから」

リアに驚いているなのはに、ユーノが説明している。

(レーナーは、任せて大丈夫そうだな)

さて、こつちも何とかするか。

「民間人への魔法攻撃。軽犯罪では済まない罪だ」

「ついでに言えば、この結界もちとやりすぎだな

フェイトがヴィータを睨んで告げる。俺も、それに続いて口を開いた。

「何だテメエ、管理局の魔導師か？」

「時空管理局、嘱託魔導師『フェイト・テスター』サ」

「同じく、時空管理局、嘱託魔導師『高峰 龍斗』だ」

俺達が、そう告げる。

俺は一步前に出て。

「抵抗すんなよ。お前じや、俺には勝てない。序でに言つな」
「抵抗しなければ、君には弁護の機会がある……お」

(俺のセリフ取るなよ……)

フェイトが、俺のセリフを奪い続ける。
ヤベ、ありやあ田がマジだ。

ま、そんだけ大事つてことだ。なのほの事が。

「同意するなら、武装を解除して

「誰がするかよ……」

ヴィータはそう叫ぶと、外へと向かって飛んで行く。俺は、ナハト
(斬艦刀バージョン)を扣き直して言った。

「リアとゴー、その子を頼むぞ。フェイト、行くぞ

「うん」

俺達は、二人の返事を待たずに、ヴィータを追つて外へと飛んだ。

龍斗 side out

なのは side

私は、フェイントちゃんと天使の男の子が飛んでいくと、ユーノくんに回復魔法を頼んだ。でも・・・。

「僕より、彼女の方が早いよ。お願ひできますか？」

「はい。では、失礼します・・・ヒール！！」

すると、私の体を白い光が包み込んだ。

光が晴れると私の傷は癒え、レイジングハートも元に戻つていた。

「すみません。私では、魔力の回復は出来ませんので、そちらはユーノさんにお願いしても宜しいですか？」

「解りました」

「あの、有難う御座います」

私は、リアさんにお礼を言った。

「いえ。ところで、なのはせん。先ほどの方に見覚えは御座いますか？」

「いえ……」

「わつですか……」

「でも、もう大丈夫。フェイトにアルフ、それに龍斗もいるし」

何でも、さつきの男の子（龍斗くん）が、この結界内に無理矢理転移してくれたお陰で、間に合つたってコーノくんが教えてくれた。リアさんは、彼に使える使い魔みたいなものだつて、コーノくんは言つてた。でも、リアさんは。

「私は、マスターのユニゾンテバイスです。詳しい」説明は、後ほど

て言つてた。ユニゾンテバイスってなに？

「さて、ここに留まるのも危険でしづから、一旦外に出ましょ

ユーノくんがリアさんに提案した。リアさんも、同じことを考えていたみたいで、頷きながら私を支えてくれた。

（フヒアトちゃん……）

なのは side out

龍斗 side

俺達は、ヴィータに追いついた。と言つより、ヴィータが上空で待つていたと言つた方が正しいか。

「フュイト、取り敢えず手を出すなよ」

「え？ でも・・・」

「良いから。それと、あんまし俺から離れるな」

「う、うん／＼／＼

俺はそう言つと、斬艦刀を振つた。

すると、刀身から放たれた斬撃が、ヴィータを襲つ。

「グラーファイゼンーーー！」

ヴィータは、叫ぶと、指の間に出現した四つの鉄球（？）を打ち出してきた。
そして直ぐ様、障壁を張る。

（なかなか、良い反応だ。・・・だけどなーー！）

斬撃は障壁に阻まれ消滅。

俺も飛んできた、鉄球をガトリングポットで撃ち落とす。

(お? !、ヴィータのやつ、ちょっと驚いている)

しかし、その隙に乘じてアルフがヴィータの下方から仕掛ける。

「ファイア・ブレイク!!」

アルフは炎を纏った拳で、ヴィータの障壁をぶん殴った。すると、障壁は破壊されたが、アルフも反動で大きく後ろへ後退した。

そんなアルフにヴィータが追い討ちをかける。

「こんの!!」

「うひっ!!」

ヴィータの一撃で、アルフが吹っ飛ぶが、障壁で防いだから外傷は見当たらない。

俺は、ヴィータに斬りかかった。

しかし、ヴィータはそれを苦もなくかわす。

そんなヴィータに追い討ちを掛けるかの如く、フェイトとアルフがバインドをかけようとしている。そこへ、俺が再度斬りかかる。

「おら、どうした? お前の実力はそんなもんか?」

「うるせー!!」

俺は、手を休めることなく斬りかかる。
しかも、あのバカデカイ斬艦刀を片手で。

「だつたら、本氣出すか・はあ！！投降するか・くつ！！しろ！！」

「うつせーよ！！・ぐつ！！テメHこそ・うつ！！手え抜いて・は
あ！！んじや、ねえよ！！」

あらり、ばれてたか。まあ、だからと言って本氣出す訳にもいかないけどな。そうして、俺達は一進一退の攻防を繰り広げていた。

龍斗 side out

ヴィータ side

アタシは正直、焦っていた。
せっかく見つけた大物だったのに、管理局の奴に邪魔された。
しかも、黄色い髪の方はわからぬけど、いま目の前にいるこいつは、間違いない強い。

天使みてえな羽生やして、バリアジャケットはシグナムのより重装甲みてえだし。
おまけにスピードもある。

(カートリッジ残り一発。他の奴等ならまだしも、こいつ相手じゃ
ゼットー足んねえ)

今は、アイツが片手だから何とかなつてつけど。両手で持つて、本
気出されたらマジでやべーよ。

(実際、パワーも半端ねえし、こいつバケモノか?—)

ヴィータ side out

なのは side

私達は、フェイトちゃんの戦いが見えるビルの屋上に来ていた。
そこから私は、彼の戦いを見ている。

「凄い……」

あれだけ大きなデバイスを、片手で振るつている彼の姿に目を奪わ
れた。
多分、一撃一撃がフェイトちゃんやあの赤い子よりも重いのは、端
から見ててもわかる。
だって、あんなに凄い攻撃をしてきたあの子が押されてるから。

「リアさん。龍斗のやつ、本気でやりますか?」

「いえ、現在のマスターはフェイトさんの相手をしている時と、ほぼ変わらない程度の力しか出していません」

「で、ですよね・・・」

ユーノくんとリアさんが、そんな事を話していた。
え？あれで、本気じゃないの？
じゃあ、彼の本気って一体・・・。

なのは side out

龍斗 side

「はあーーー！」

俺が、大きく横薙ぎに払った際、ヴィータは避けきれずグラーフアイゼンでそれを受けた。

そして、衝撃を流すために後方へと後退したが。

「なつ？！」

アルフのバインドにより、その動きを封じられた。おーおー、暴れてるよ。

俺はナハトを肩で担いで、フェイト達の前に立つた。

そして、フェイトがバルティッシュをヴィータに向けて言つ。

「終わりだね。名前と出身世界、目的を教えて貰つよ

フェイトは、ヴィータの手を見て、そう告げた。
ヴィータは、そんなフェイトを睨んでいる。

いや、フェイトと俺を睨んでいるの方が正しいか。

(ま、何にせよこれで……?)の気配……)

俺は、その気配に気付き叫んだ。

「フェイト、アルフ^ミ気を付ける!—!

と次の瞬間、フェイトが何者かに斬りかかるれた。
ありやー、シグナムか。って事は、ザフィーラも一緒にはず。
ちょいと、面倒だな。

「フェイト、アルフ^ミ下がつてろ。今のお前達じや、こいつ等には敵
わない」

俺はそう言つと、広域探索をかけた。ターゲットはシャマル。
ま、俺の探知が気付かれることはまず無いけどな。

「え?でも、龍斗……」

「安心しろ、こいつ等の相手は俺がする。お前達は、リアの所にいてくれ。リアの障壁は俺ですら、破るのに苦労するからな」

「アンタ、まさか・・・」

「ああ、少しばかり本氣を出す」

「大丈夫なの？」

フェイトが心配そうに、俺の翼に触れる。

「安心しろ。俺は間違いなく、強ええ」

「うん、でも・・・」

「それによ、お前の可愛い顔に傷つけるわけにもいかないだろ」

俺はそう言ひつと、フェイトの頭を優しく撫でてやった。

「はう／＼／＼／＼／＼

すると、フェイトは顔を真っ赤にして俯く。
熱でも出たか？

俺は、フェイトの頭を撫でつつ、アルフにも言つた。

「アルフも、無茶させられないしな。綺麗な肌してんだから、傷でも残つたら大変だ」

俺はそう言つて、アルフに笑いかけた。
すると、アルフも顔を赤くして、そっぽを向く。

「や、そこまで言つてくれるんなら、しようじょうがないか／＼／＼

「一人とも、どうしたんだ？」

「ま、だからさ。待つてくれよ」

俺がそう言つと、一人は納得したようで、その場を離れた。
俺は、シグナム達に殺氣を放ちながらリアに念話で話し掛けた。

（リア、イージスの盾を張つておけ。

）））等、蹴散らす序でに、この障壁も粉碎する

（了解致しました、マスター。お気をつけて）

（ふつ。誰に言つてんだ。俺が負けるはずがねえだろ？）

（うふ。そうでしたね）

（盾を頼むぞ）

（はい）

俺は、リアにそう伝えると殺氣を少々緩めた。
すると、シグナムが声を掛けてきた。

「貴様、名は？」

「人に訪ねるのなら、まず先にテメエが名乗れ」

「そうだな、すまなかつた。私は、ヴォルケンリッターの将『シグ
ナム』。そして、我が剣『レヴァンティン』」

そう言つて構えるシグナム。

「俺は、時空管理局嘱託魔導師『高峰 龍斗』だ。

」こいつは相棒の『ナハト』

俺は、ナハトを3rdフォーム「ツインバスター・ライフル」にして答えた。

「高峰、貴様はベル力の者か？」

「いや、ただ魔法はミッドとベル力の混合型だがな」

「そつか。貴様、我等を相手に一人で勝てると思つてゐるのか？」

「と~せん。むしろ、物足りねえかもな。お前等『四人』じゃ」

「「「なつ? !」」

「あの、離れた場所に居るのは後方支援か？ま、俺にとつては大した距離じゃないがな」

俺はそう言つと、シャマルの居る方角に顔を向けた。
シャマルもそれに気付いたようで、驚いているのがわかつた。

「貴様はいつたい、何者だ」

シグナムはカートリッジをリロードして、レヴァンティンを俺に向ける。

後ろでは、いつの間にか帽子を被つたヴィータもグラーフアイゼンにカートリッジロードしてゐるし。ザフィーラも人化して構えている。

「俺か？ただの魔導師か。ただ、少しばかり規格外だけどなーー！」

俺はそう呟くと、アーマーをフルオープンにした。その瞬間、三人が襲い掛かってくる。だが・・・。

「遅えよーーファイアーーー！」

俺の全身から、無数のミサイル解き放たれる。

シグナム、ヴィータは急停止・急上昇してかわそうとする。ザフィーラに至っては、急停止後に障壁を張り凌げりとした。そして、約1／4はシャマルへと向かって飛んでいった。

しかし、これは俺の魔力で無刃蔵に作り出されたミサイル。攻撃の手が休まることはない。

更に付け加えるなら、追尾型だ。逃げられる筈がない。

「ぐつーーなんという攻撃だーー！」

近場にいた、ザフィーラが叫ぶ。「愁傷様。

俺はスラスター駆使し、縦横無尽に飛び回しながら、ミサイルの風を巻き起こした。

「これで、シャマルも防御に徹するしかねえよな」

俺は、なのは達を見た。

全員が唖然としている。それもその筈、俺はこうじている間に、毎秒30発ものミサイルを放っている。

これは、フロイトとの戦闘訓練でも出したことが無いし、俺個人の訓練でも、これ程の数を産み出したことは無い。

なのはside

フェイトちゃんとアルフさんが、戻ってきた。
何でも、さつき襲ってきた人達を彼が一人で相手をするつて言った
みたい。

「本当に、大丈夫なのフェイトちゃん」

「うん。龍斗は強いから」

そう言ったフェイトちゃんの目には、彼の強さを確信してゐるみたいな力強さがあった。

「それにしてもリア。アンタのこの障壁、とんでもないね」

アルフさんが、リアさんの張つた障壁を見て言った。

「やうですね。私も、この魔法はマスターから頂いたのですが、何でも时空震すら耐えられるらしいですよ」

リアさんが、少し嬉しそうに答える。
て、时空震にも耐えちゃつ障壁つて、凄すぎ。

「」たなときでも、龍斗の凄さを思い知らされるなんてね

「」くんも、少し呆れてるみたい。

あれ？ フェイトちゃん、どうしたんだろう？

「フェイトちゃん、お顔が赤いけど、どうしたの？」

「え？ …な、何でもないよなのは…。」

急に動搖したみたいに、声が裏返しちゃった。
なんで？

「フェイト、わざと龍斗に言われたこと思い出してたでしょ」

アルフさんが、フェイトちゃんのほっぺたを、つつきながら笑ってる。

あれ？ アルフさんのお顔も少し赤い気が…。

「ア、アルフ！ …私は別に、可愛いとかそんな…。（＼＼＼＼＼）」

あ、フェイトちゃんがまた真っ赤になっちゃった。

可愛いって、何の事だろ？

あれ？ リアさんが苦笑してるし、コーンくんも何だが呆れてるみたい。

皆、どうしたんだろ？

「取り敢えず、なのは。龍斗には気を付けた方が良いよ」

「う、うん

ユーノくんが、ちょっと真剣な顔でそう言った。
でも、何で？

なのは side out

龍斗 side

「さて、そろそろ決めるか」

俺はそう言つと、アーマーを閉じツインバスター・ライフルを空に向けて構えた。

（ま、この数のミニサイルだシグナムとヴィータもまだ追われてるし、
シャマルとザフィーラは爆煙で周囲の確認が出来てないか）

俺は、それを確認するとチャージを開始した。
俺の周囲には、複雑に絡み合つた魔方陣。

そして、舞い散る無数の白い羽。

周囲には突風が吹き荒れ。

膨大な魔力が、砲身に集中した。

「殿。これ以上は、時空震を引き起こす恐れが有るゆえ、此方で集
束に制御を掛けても宜しいか？」

「ああ。てか、この威力なら余裕でぶち抜けるよな？」

「御意」

「「うしーーならいくぜーー！」」

「「排除、開始！！」」

ビゴゴゴゴゴーーー

俺がトリガーを引くと、巨大な砲撃が天を切り裂いた。そして、凄まじい衝撃波を放ち、周囲に展開していた結界を『消滅』させた。その威力は凄まじく、アースラの観測機材が一時ストップしたり計測機器が測定不能を示したりと、艦内は一時騒然としたらしい。そのせいも有つて、ヴォルケンリッター達の追跡が出来なかつたと、後でしこたまエイミイに怒られた。

それと、魔力の消耗が著しかつたのはレイジングハートを本局へ連れて行く事になつた。

俺はその間に、今回の件の報告書の作成。

フェイトはなのはに着いている。

取り敢えず、今回は何とかなつたか？

しかし、散り散りに逃げ行くヴォルケンリッター達の映像の中、ク

ロノはそれを目にした。

第一級ロストロギア通称『闇の書』を手に、飛び去るシャマルの姿を。

『「戦ごの風、ふたたびなの」って戦わなかつたら、この作品成立しないたろ』

「ぢり「いや～、今回は長かつた」

龍斗「・・・おー」

「ぢり「ん~?」

龍斗「何か言ひことがあるだろ?」

「ぢり「お~、確かに!」

龍斗死ね

龍斗「何でそうなる!..」

「ぢり「だって、今回の話で確實にフロイトファンの皆様を敵に回しだろ?ついでに、アルフファンも」

龍斗「お前がそう書いたんだろ!..」

「ぢり「てへ」

龍斗「ナハト!..」

ナハト「セットアップ」

「ぢり「あり?」

龍斗「フルオープン・ファイア!..」

リア「やり過ぎですよ、マスター」

龍斗「どうせこの程度じゃ、くたばらねえよ」

どう 確かにね

龍斗&アムロ・リアード 復活早(過ぎてす)!!

いまでも絶られにはなしは悔しいしゃん

リア「あまり、讐めてないと思しますよ」

卷之三

龍斗&リア - はあ -

どうも、そう言えば、今日は本編からゲストが来てたんだ」

龍斗一おいでなんな話し聞いてねえぞ

とひらへうん

リア「……もしかして、先程から彼方の隅にいらっしゃる方です

か？」

「そだよ～。それでは、紹介します、本編よりお越しのフェイトちゃんで～す」

「ヒート、ど、どうも」

「やつぱり可愛い～！～お持ち帰りい～！」

「すんなボケ～！」

「ブスッ～！」

「ギャアアアアア～！～刺さつてる、刺さつてる～～～！」

リア「マスター、流石にナハトレスフォームは大きすぎるかと」

龍斗「別にこいつだから、構わないだろ」

「ね、ねえ龍斗。作者さん、大丈夫なの？」

「問題ない」

「その通り～！」

「きや～～！」

「な、言つた通りだろ？」

「う、うん・・・」

龍斗「んじゃ、時間も無いし、いつも行くぞ」

全員『今回も、本作品を『愛読頂いた全ての皆様へ、心よりの感謝を申し上げます』

龍斗&アコロ・フハイド「つきましたは、皆様からの『意見・ご感想等をお待ちしております』」

アコロ・リア「尚、誹謗・中傷に關しましては、お控え頂くよつい理解の程、宜しくお願ひ致します」

龍斗「それでは、次回予告『海鳴市に帰つてきて、色々とフラグが立つ予感がしてゐるんだよ』」

全員『心して見よー!』

ナハト「取られた」

『海鳴市に帰つておひ、色々とフリフリが立つ予感がしてゐるんだよ』（前書き）

更新遅れて、申し訳有りませんでした。

次回はもう少し早く、投稿したいと思います。

それと、先日シグナムとヴィーサのデバイス名についての指摘を頂き、訂正致しました。そのついでと申しますか、プロローグから現在投稿した分の話に少々手を加えましたので、そちらも『愛読頂ければ幸いです。

では、長々とした前書きでになつてしましましたが、本編。

『海鳴市に帰つてきて、色々とフリフリが立つ予感がしてゐるんだよ』

始まります

『海鳴市に帰ってきた、色々とフラグが立つ予感がしてるんだよ』

ヴォルケンリッターとの一戦を終えた俺達は、時空管理局本局へとやつて来た。

なのはは、先の戦闘で消耗した魔力の回復のため医療室にいる。フェイトも、なのはの見舞いに向かつた。

んで、俺はと言つた。

「マスター。いつ、その様なものを作ったのですか?」

「ん? 報告書を書いてた時だけど?」

「殿は、隠密行動にも長けているやもしれんな

「それで、あれだけの量の報告書をものの数十分で片付けるんですね」

リアに呆れられ、ナハトに感心されていた。

え? 何をしたかって?

そいつは、まだ秘密だ。

「しかし、なのはのリンクアーコアの採取を阻止できたのは良いが、やっぱ、レイジングハートとバルディッシュのダメージは深刻か」

そう、先の戦闘でレイジングハートは中破、バルディッシュも外装にヒビが入つていた。

「はい。今はユーノさんとアルフさんが、お二人の診察を行つてい

るやうです

リアは、そう言つと少し俯き加減に顔を伏せる。

リアは各『テバイス達とも仲が良い。ナハトは当然だが、A.I搭載型の『テバイス達とはよく、自分達の性能や^{マスター}主の実力、果ては自分達や主の成長のための課題についても話し合つてるとか。

そんな友人達（？）の傷付いた姿を見るのは、彼女にとつて耐えがたいものだったかもしれない。

「ま、バルディッシュュはそこまでじゃないが、レイジングハートは悔しいだろな」

「はい。『マスターを守れなかつた、私にもつと力があれば・・・』と。バルディッシュュさんも、それを聞いて『あの時、龍斗さん（マスター）が前に出でくれなければ、私もレイジングハートと同じ運命だつたでしよう』と」

「まあ、そなのがわかつてたから、俺が戦つたんだけどな」

「殿は、何故そこまでして、戦おうと？」

「ん？まあ、アテナに殺されて『この世界』に来た以上は、俺に出来る何かをしたいって思つてな」

「マスター・・・」

「それにさ、アイツ等には失つて欲しくないんだよ。俺と『同じ思いをさせたくない』。ま、結局は自己満足に過ぎないけどな・・・」

「殿？」

「マスター？」

「いや、何でもねえ。今は忘れてくれ

「いや、しかし殿……」

「良こかい、この話は終りだ

「ひつ。俺としたことが、口が滑ったな。幾らマイツ等でもまだ、これまで話をすませざる。

(俺としたことが、ミスったな)

「やはり、なのは見舞いに行こうだろ？・龜ヶ島

まだ、何か言いたそうなリアとナハトを急かして医務室へと向かった。

龍斗 side out

リア side

先程見せた、マスターの憂いを帯びた表情。

実は、私達はマスターの事をまだ何も知らないのでは無いだろうか。

(それでも、私はこの方を守り抜いてみせる)

私は、新たな決意を胸に秘めたのです。

リア side out

なのは side

私は、目を覚ました。

「知らない天井だ」

何故か、そう言わないといけない気がして、私は呟いた。

でも、本当にここは何処だろ?私は、何となく辺りを見回してみた。

プシュー。

扉が開いて、フェイクトちゃんが入ってきた。
でも、少し表情が暗い。

「フュイトちやん……」

「なのは……」

「あの、『めんね。せつかくの再会が』『んなで。怪我とかしなかつた?』

私は、苦笑い(?)をしながら聞いてみた。

「うん。私は全然。
でも、なのはが」

フュイトちやんの表情は、やつぱり、まだ暗い。私は、フュイトち
やんを元気付けたくて笑顔で。

「私は平氣、フュイトちやん達のお陰だよ。元氣元氣。つふふふふ。
・・あ、フュイトちやん」

フュイトちやんは今にも泣きそうな顔になっていた。
私は、そんなフュイトちやんの所に行こうとして。

なのは side out

「フュイトちゃん・・・あ?..」

見ると、ベットから立ち上がったなのはが、倒れそうになつた。

「なのはーー」

私は、なのはが倒れる前に抱き止めた。

「あはは、『めんね。まだちゅうと、フリフリ』

なのはは、そのままと少し力無く笑つて、私を見た。

「うん」

私も、小さく返事を返すしか出来なかつた。
でも、なのはは笑顔を作つて、こう言つてきた。

「助けてくれて、ありがとう。フュイトちゃん。
それから、また会えて凄く嬉しいよ」

「うん。私も、なのはに会えて嬉しい」

そう言つて、私達は互いに抱き合つた。

で、俺達は今、フロイトとなのはがハグして居る現場を目撃していた。
と言つても、別に部屋の扉が開いてた、とかのオチでは無く。
部屋に入つたら、やうだつたつてオチだ。

(こや、この場合どうも変わらないか)

で、現在進行形でなのはと目がバツチリ合つたりもある。

「あ～・・・・」
「て、ええ～・・・

俺は、そのまま回れ右をしようとしたら、なのはが叫んだ。
その声にひられて、フロイトも「ひりを向く。

あ～、フロイトもバツチリ田え見開いてるよ。

「つゆ龍斗？！え？何で？！」

「ああ～、いや・・・そいつの見舞いに来たんだけど、忙しいみたい
いだから出直す

「え？忙しそうって・・・ちつ違つよ？！龍斗、何か勘違いしてるー。
！」

「いや、勘違いも何もないだろ？それにしても、フュイトがソッチの子だったとは」

「ソッチって何？！……だから龍斗、待つてってーー。」

「あー。わあったから、病室で騒ぐな。てか、テンパリ過ぎだ」

「はう・・・・」

俺達が、そんな漫才（？）をしている間、なのははポカンと口を開けていた。

まあ、普段のフュイトからすると、有り得ない慌てようだったからな。

で、俺は再度なのはに向かって会った。

「よお、悪かったな。直ぐに駆け付けられなくて。お前やお前のデバイスに相当、無理させちまつて、すまないと困つてむ」

俺はそういうと、なのはの頭を優しく撫でていた。

「え？！／＼／＼

なのはが、驚いて顔を真っ赤にした。

え？何で撫でてるんだって？何となくだーー！

まあ、身長差が頭一つ分位あるから、頭を下げるよつ、こつちの方が絵図等的に映えるかと思つてな。

俺は手を引っ込めると、改めて自己紹介をした。

「取り敢えず、初めましてだな。俺は『高峰 龍斗』ファイトと一緒にアースラに乗ってる、囁託魔導師だ。で、こっちのピアスがインテリジョントデバイスの『ナハト』で」

「宜しく頼む」

「で、こっちのちつこいのがユニゾントデバイスの『リア』だ。て、ここの挨拶はすんでたか」

「はい、マスター。ですが、改めて宜しくお願ひしますね、なのはさん」

「あ、えっと・・・『高町 なのは』です。さつきは、助けてくれて、有り難う御座いました」

いきなり、敬語で返された。はて?この状況は、俺が年上だと勘違いされてるパターンか?

「じゃあ、なのは。一つ言つておくぞ。俺も9歳だ。敬語なんか使うな」

「え?ええ~?!」

本日の二度目の絶叫。案外、五月蠅いのか?
故に、将来は魔王か・・・。

なのは side

今日は、あの赤い子の襲撃から驚きの連続です。まず、凄くカッコイイ男の子とフェイトちゃん達が助けに来てくれて、その男の子が沢山のミサイルを撃つたり、凄く・・・大きい・・で、じゃなくて、とっても大きな剣や鉄砲ライフルを使って戦つたり、フェイトちゃんが、お顔を真っ赤にして物凄く慌てたり、その男の子が歳が私達と一緒にだつたり。

「あ、えっと・・・りゅ、龍斗くん？」

同じ年で、敬語はおかしいから、私はくん付けで龍斗くんの名前を呼んでみた。

「お、そっちの方が、しつくり来るな。なのは」

へう。そう言って、私の名前を呼んでくれた、龍斗くんは眩しい程の笑顔だった。でも、名前を呼ぶのも呼ばれるのも、凄おーく恥ずかしいの。

でも、何でだるう？龍斗くんに名前を呼ばれただけで、胸の辺りが急にぽかぽかしてきた。

（フェイトちゃんの、お顔が真っ赤だったのも、これのせいだったのかな？）

だとしたら、わかる気がする。だって、色々と反則だもん。

なのは side out

龍斗 side

さて、血口紹介も済んだし、そろそろ『アレ』渡すか。

「んでよ、なのは。お前、甘いもん好きか？」

「へ？ 好きだけど、どうして？」

問に返してきたなのはに、俺は持つてきた紙袋（小）をなのはに渡した。

因みに、中にはもう一つラッピングされた袋が入っている。

「まあ、お前自身の怪我も傷が残らなかつたし、魔力も回復して来てる。

それと、助けに行くのが遅れた詫びだ」

「えっと・・・開けても良いのかな？」

なのははまだ、訳が解らない様子で、頻りにフェイトに視線を向けている。

「大丈夫だよ、なのは」

フエイトが、笑顔でそう言うと、なのはは袋をガサゴソし出した。そこで、中の袋を取り出して目を輝かせた。

「うわ～ クッキーだ～」

「時間が無かつたんで、大したものは作れなかつたけど、それで許してくれ」

「作るって、これ龍斗くんが作ったの？」

ん？ そうだぞ。口に呑むなかつたら捨ててくれても構わねえぞ」

「そ、そんな事しないよーー! だって、龍斗くんが・・・」

何だか、ゴーヨゴーヨしてるが、まあ良いか。

「まあ、これから宣しくな」

の手を差し伸べてきた。

「うん 宜しくね龍斗くん」「

そう言って握り返された手は、少女らしいとても小さな手だった。

(やべ、魔王も実はちよっと可愛いか?)

俺は、そんな事を考えていた。

フュイアード

「まあ、これから宜しくな」

「うふ 宜しくね龍斗くん」

そう思つて握手した龍斗を見て、私は少しモヤモヤしていた。

(龍斗、私にもむつと優しくしてくれても良いの?)

そう思つていると、不意にリアさんが私の耳元まで飛んできた。

「フュイアードさん。これから、大変なつですね?」

「え?...うふ・・・はい。でも、龍斗だから・・・」

「涼りぐ、『氣』が付かないでしおね・・・」

「ですよね・・・」

私達は、どちらともなく小さな溜め息をついた。
龍斗、鈍感すぎるのは罪なんだよ。

龍斗 side

なのはの見舞いの後、俺は別行動を取っていた。

クロノがなのはとフェイトを連れてどっかに行つた。多分、デバイスの様子を見に行って、その後にグレアムに会うんだろう。俺は、グレアムに会つたら、その場でぶち殺しかねないので、クロノの誘いを『丁重にお断り』した。（後にリアは語る「アレは『脅し』と言います」と）。

んで、俺は今後の予定をリンクディさん【聞きに】ラウンジに来ていた。

「で、『闇の書』の搜索にアースラが任命されたと？」

「ええ。でも、アースラは修理で本局ドック待機なの」

「となると、闇の書が関わったとおぼしき事件の中心世界『地球』に架設本部を設営して、そこを中心に搜索するのが上策か」

何て会話をしていたりする。

え？ 何でこんなに話がスムーズに進むかって？ そんなの、『都合主義だからに決まってるじゃん

「ええ。そこで、私達アースラスタッフとフェイトさんやアルフさ

ん、それにゴーノくんにも同行してもうむづむづしてゐるわ」「さ

「ふ〜ん。じゃあ、俺もそれに着いて行く感じ?」

「お願い出来るかしら?」

まあ、保護者のリンディさんには頼まれて、断るほど俺もスレで無いので構わないが・・・。

「構わないけど、一つだけ条件出して良い?」

「ええ。無茶な事じゃなければ」

「ん。多分、大丈夫。あっちに行つてから俺も独自に調べるから、その事に干渉しないでくれれば良いよ。
俺が仕入れた情報は、そっちに流すから」

「わかつたわ。此方でも、何かわかつたら教えるわね」

そう言って、微笑むリンディさん。

あ〜、マジで子持ちなのが不思議だ〜。
ん?何でさつきから、タメ口のかつて?それは、リンディさんが
それで良いくて言つたからや!—

クロノもフロイトも、話し方がちと固いから、俺くらひはフランク
に話してくれつて言われたんだよ。

「了解。んで、地球上に着いたら俺達は何処に住むの?」

まあ、リンディさん達が住む場所は知ってるけど、それは原作での話しだ。

実際、俺は他のスタッフと一緒にになるのかなー？

「私達が住むのは、海鳴市なのさとのお家の近くよ。因みに、貴方も一緒にね」

へ？何と仰有いました、このご婦人は？俺も一緒に住む？

「え～っと・・・俺の聞き間違いだよね？一緒にさ、「貴方も一緒に住むのよ（＝口上）」・・・はー」「

ビリヤリ、拒否権は無こようだ。

龍斗は諦めた。

弱いな俺！！

そんなこんなで、アースラリー一行+と共に地球へ向かった俺達。

フェイトが「近所さんになることに、喜んでいたのはだつたけど、俺がフェイト達と一緒に住むって聞いた時、物凄い形相だった。しかも、俺が睨まれたし。

（俺が悪いのか？）

フェイトはフェイトで、ずっと俺の服の裾を掴んでるし。クロノも何故か睨んでくるし。

う～む。もしかして、俺って不幸？

で、帰つてきました海鳴市！！

フェイトとなのはが、外の廊下でキャツキヤ騒いでいる。

「それにしても、龍斗君は良いお嫁さんになるね」「

「おい、エイミィ。俺は嫁に行くのか？」

「確かに、龍斗の家事スキルは抜群に高いな！」

「クロノも、余計な事抜かすな」

そんなやり取りをしていても、俺の手が休まることは無く。実際、既に終わっていた。

「にしても、アルフもユーノもこっちでは、その姿なんだな」

因みにその姿とは、アルフ『仔犬モード』とユーノ『珍獣モード』の事だ。

「珍獸じや、なあ～い！－フュレットだ！－」

「て、勝手に人の心の声を聞くんじゃねえよー！」

てな具合に騒いでいると、来客があつたじじい、コンピュータさんが玄

関へと向かつた。

俺は、リアに買い物を頼もうと別室に向かう途中で、声をかけられた。

「龍斗君、ちょっと良いかしら？」

「ん？ なに？」

リンディさんに呼ばれて、玄関に行くとそこにはアリサ＆すずかが居た。

二人は、物珍しそうに俺を見ている。

「なに？ おやつにはまだ早いけど？」

「龍斗くん。こちら、私の友達のアリサちゃんとすずかちゃんだよ」

俺の華麗なボケをスルーして、なのはが一人を紹介してきた。
なかなかやるな、なのは。

「アリサ・バニングスよ」

「月村 すずかです」

二人が挨拶してきたので、俺も返すことにしてた。

「高峰 龍斗だ。宜しくな」

と、笑顔で返した。

そしたら、二人とも顔を真っ赤にしたので、熱でもあるのかと尋ねたら、全力で否定された。
何で？

後に語られるが、この時にアリサとすずかが龍斗と一緒に田惚れしたらしい。

そんな状況を、廊下から見ていたリア（アウトフォーム状態）は内心、こう思っていた。

（また、マスターのハーレム要員が現れました。

マスター、恐ろしい子！－

これが、龍斗の人生勝ち組への序曲であつたことは、言つまでもない。

『海鳴市に帰つておひ、色々とフリケが立つ予感がしてゐるんだよ』（後書き）

龍斗「さて、今回の更新が遅れた件についての謝罪を聽いてつか？」

どいら「申し訳ありません…！仕事が忙し「知るかああああ…」。
・・『免なさこ』

龍斗「つたぐ。お前の私生活に関しては、まったく興味が無いんだ
よ…。」

リア「やうです。もひと、早く更新して下せこ」

どいら「え？俺に味方無し？」

ナハト「当然だな。」ここまで、我等を待たせただくでなく、読者の皆様にも多大な迷惑を掛けたのだ。この程度の事は、当然の報いであります」

どいら「俺つて一体…。」

リア「存在しなくても、良い方です。」

どいら「へぶし…。」

どいらの急所にクリティカル のダメージ。

どいらは力尽きた。

龍斗「さて、ここでの反省会は後でやるとして、こつものやるか」

龍斗&・リア「「今回も本編を」」愛読頂き、誠に有難う御座
います」「

リア「つきましては、本作に対する」意見・『』感想の程を頂ければ幸いです

龍斗「誹謗・中傷に関しては、恐れながら厳しく対処させて頂きます」

龍斗&アム・リア&ナハト「「では、次回『一度田の小学生をやる』に当たって、最近の小学生は生意気な」と心得ると感じいらっしゃい」

どう「心して見よ!!」

龍斗&・リア&・ナハト「「生きてた（ました）！」

۱۰۷

『一度田の小学生をやるに当たって、最近の小学生は生意気なことを心掛ける』

なかなか更新できなくて、申し訳有りませんでしたーー。

次回は、もう少し早く更新したいと思います。

では『一度田の小学生をやるに当たって、最近の小学生は生意気なことを心掛ける』

始まります

『——度田の小学生をやめに当たつて、最近の小学生は生意気なことを心がむかへ』

さて、やつて参つました翠屋——！

現在、俺達一行（なのは・フュイト・アリサ・すずか・リンディさん・仔犬アルフ・珍獣）は高町夫妻への挨拶も兼ねて翠屋に来ていた。

んで、リンディさんはレジ付近で話し込んでいる。

俺達はオープンテラス（？）でお茶していく。

「うわ～ゴーノくん、久しぶりだね」

「ん～・・・アンタ、どうかで見たことあるよ？」

なんて、すすかとアリサがアルフ達を抱えて言つていい。俺は、そんな二人を眺めつつ周囲に気を配つた。何だか知らないが、妙に見られている気がする。

「龍斗、おかわりは？」

「いや、まだ良いよ。ありがとなフュイト

「龍斗くん、どう？翠屋の紅茶は？」

「俺は好きだな。今はダージリンだけど、アールグレイなんかも今度、飲んでみてえな」

両隣に座つたフェイドとのせば、さつきからチョイトイ話しが掛けてくる。

まあ、良いんだけじ。お陰で、アリサとすずかが声を掛けたタイミングを見失っているようだ。

「龍斗くん、髪長いよねえ。お手入れとか、してるの？」

「龍斗、後で何か頼む？」

「龍斗くんって、お勉強出来るの？良かつたら、私に国語とか教えて欲しいなって」

「龍斗、いつになつたら料理教えてくれるの？」

「「龍斗^{くん}……」」

「だああああ！…ちつたあ黙れ！…それと、話してると内容がバラバラ過ぎるだろがあー…」

俺は、軽くキレた。

いやだつて、マジでこの調子だぞ。

いぐり温厚（？）な俺でも、声を上げるだろ。

（殿、なのは嬢とフロイト嬢にもう少し、優しくしても善このではな

（？）

（おい。俺は結構、優しい部類の人間だろ？）

（・・・）

（後で潰す（殿は最高の主のです…）・当然だろ？）

ナハトとみんなやり取りをしていくと、アリサが話しつけてきた。

「ナハト、高峰は何処の出身よ?」

「ん?俺か?俺は遠見だ。ただ、家庭の事情で今はリンクティさん所でやつかいになってる」

「へ~じゃあ、今はフェイトちゃんと一緒に住んでるの?」

「うーん、すずか参加。まあ、普通に考えればそこに行き着くよな。

「ああ。まあ、ハイハイも一緒に。別に不思議は無いだろ」

「それ以前に、フェイトと知り合った方が問題ね」

「うん。私も、同じ」と考へてた

「そつ書つたアリサとすずかから、何だか黒いオーラが見えた気がした。

(多分、気のせいだよな・・・フェイト、話しあわせりよ)

(え?ーう、うん・・・)

俺は、念話でフェイトに一言入れといた。
さあ~て、かましますか。

「ああ~・・・まあ何だ、家の両親が一年前に死んでな。
事故・・・だつたらしいが、真相は俺も知らない。
ま、死んじまつたって事実は変わらねえから、泣き言は言わねえけ

どよ。

んで、先日までは叔父きの所に居たんだけどよ、叔父きも死んだんだよ。

元々、独り身で心臓が悪かつたからな。

ま、いい人だつたけどな。

でも、寿命だつたんだろう。

最後は、笑つてたよ。

んで、昔からの知り合いらしい、リンディさんが拾つてくれたって訳だ。

だよな、フュイト

俺はここまで話すと、フュイトに振った。

まあ、九割くらいは事実なんだよな。

「・・・うん」

あ～、やっぱ微妙に暗くなつちまつたな。

でも、これで今後の追求は無いだろ。

それに、時期が来れば『俺は別の世界から来た』って事も説明しないとな。

龍斗 side out

高峰（君）つて、色々な意味で凄い奴（人）かも。

（アタシは、耐えられないな・・・）

（私だったら、きっと耐えられない・・・）

でも、だからいいと思う。

（（高峰（君）が押し潰されそつた時はアタシ（私）が支えになつてあげよう！――！））

アリサ&・すずか side out

龍斗 side

俺が話し終えてから、アリサとすずかが何か考え込んでいた。だけど、直ぐに何か決意したような瞳をしたので、俺は深くは考えなかつた。

（アーッ等も、何か思うところがあつたのか？
まあ、良いや。）

で、俺はアリサとすずかにむきから感じじる、違和感を伝えた。

「そお言えば、何で俺の事は苗字で呼んでんだ？」

俺等、もうダチだろ？出来れば、名前で呼び合おうや。

アリナ
すすか

俺が一人を名前で呼ぶと、一人は沸騰したかの様に真っ赤になる。どうしたんだ？

「あ、アンタがどうしてもひて言つなら。しょ、しょうがないわね。

と、叫ぶアリサ。

「え、えっと。それじゃあ……りゅ、龍斗君——！」

すずかは控え目に、少し俯き加減で呼んできた。

۱۶۰

俺は、そんな一人に笑顔で答える。

龍斗 side out

なのは Side

龍斗くん、何だかわたしやフェイトちゃんよりも、アリサちゃんとすずかちゃんに対しても優しい気がするの。でも、そんな龍斗くんを好きになっちゃったんだけどね。

はうへ、モヤモヤするよ。

フェイト side

あ、龍斗の笑顔。良いな。

それにしても、さつきの話。

もしかして、本当の事なのかな?話しているときの龍斗、何だか寂しそうだった。

今度、時間があったら聞いてみよう。

あれ?

フェイト side out

龍斗 side

そんなこんなで、なのは達と話し込んでいた、びつかで見た顔が俺達に近付いてきた。

「ありや～、アースラのオペレーターの・・・誰だっけ？
まあ、ここは『オペA』と呼ぼう。

んで、オペAは何やら大きめの紙袋を持って、俺達の席まで来た。

「龍斗君にフェイトちゃん。リンティさんから、一人に渡すよつて頼まれたものを持ってきたよ」

そう言つと、オペAは俺とフェイトに大きめの箱を渡してきた。

「爆発しねえよね？」

「まさか（笑）。したとしても、君なら問題無むやうだけだよね」

俺の軽いジョークにオペAも、笑つて返す。
で、箱の中身は・・・。

「服？ てか、制服か。何処のだ？」

見ると、フェイトも同じ学校の物とおぼしき制服を持っていた。
まさか・・・。

「あ～～！ それ、うちの制服～」

などと、なのはが叫んだ。
やっぱりか・・・。

しかも、この流れは俺も・・・だよな。

で、その制服を持つてリンクティさんの所へ行く俺達。

フェイトは顔を真っ赤にして、リンクさんに「ありがと…。
／＼／＼ だつて。

うは～！～その表情、 よーーー！

で、俺は・・・。

「まさか、俺もガッコ行けど?」

「ええ。当然でしょ?小学生ですもの、しっかりとお勉強しないと
」

などと、わかりきった返答をくれたリンクさん。

いや、当然つちや 当然だけじゃ。人生二度目の小学生つて、ダルく
ね?

しかも、頭脳(知識)はアカシックコードにアクセスすれば確実
に天才だし、身体能力もサイヤ人ですよ?

下手したら、生身で空も飛べるし(笑)

それに、ガツコ行つてたら昼間、何にも行動起こせねえよ。いや、
マジで。

(まあ、いいや。昼間はリアに情報収集させつか)

俺は、今後の方針を多少変更することにした。
え?どんな予定だったかつて?簡単だよ。

図書館ではやてと接触 時間を見てヴォルケンリッターと再接触
リンクアーカー収集の手伝い 仮面野郎、フルボッコ w

を、なるべく早い段階で実行しようと思つてたけど、しゃあ無い。

はやてとの接触は、めぐらしか。

「龍斗くん、同じクラスだと感じ」

俺が思考の海に漫つてこると、なのはが皿を輝かせながら、そんな事を言つてきた。

「ん？ あ。でもよ、俺とフロイトが同時に編入だと、クラスは別になるんじやね？」

「あ～、それは有り得るわね」

俺のもつともな指摘に、アリサが同意する。
まあ、うちの作者がそんな当たり前な理由で俺だけ別のクラスになるとほ思えないよな。

(ビハのよ、クソビヒ)

(おこおこ、本編で私に聞くなよ。やつのは、後書きで答える
からや)

(本当に答えるか？)

(・・・「めんなさい」)

てな、電波的な会話(?)をしてくると、フロイトが声を掛けた。

「でも、一緒にいると良くな

「やうだね。皆一緒にの方が、きっと楽しむやうだしね」

「うとう」と

「ま、そうね。それに龍斗とフュイトが、どのくらい勉強出来るかも気になるし」

などと、話す面々。俺としては、何か厄介事が起きないかが心配だつたりする。

まあ、何とかなるだろ。

そんなこんなで、適当に解散して帰路に付いた。

そんでもって翌日。

俺とフュイトは『私立聖祥大学付属小学校』に来ていた。

職員室に行き、担任に挨拶。クラスを聞くと、俺達は3年1組に編入らしい。

(おこ、そのまま書いたなーーー)

(当然ーーだって、サブタイと違つたら読者の皆様に申し訳ないで

しょ?)

(この、クソヘタレが)

で、担任に連れられて俺とフュイトは3年1組にやつて来た。

なのは side

朝、先生が留学生が一人来るって言つてた。

龍斗くんとフェイトちゃんかな？

回りの男の子達が「先生～男ですか、女ですか～？」って、騒いでる。

先生は「男の子と女の子の一人よ」って言つた。

「海外からの留学生さんです。フェイトさん、龍斗君じいだや」

「失礼します」

「・・・」

入ってきた一人を見て、クラスの皆が驚いてる。

だって、フェイトちゃんは可愛いし、龍斗くんはカッコいいからだと思うの。

そして、先生の隣に行つたフェイトちゃんと龍斗くん。

「あの、フェイト・テスター・サヒコと言います。
宜しくお願ひします」

「高峰 龍斗だ、適当による」

フュイトちやんはお辞儀して、龍斗くんは右手を上げただけだった。
龍斗くん、素つ氣なぞ過ぎ。

なのはside out

龍斗 side

で、無事に転入した俺とフュイトは、休み時間になると早速、質問攻めにあっていた。

「向ひの学校って、どんな感じ?」

「あつざー、急な転入だよね。何で?」

「日本語上手だね。どうやったの?」

「前に住んでたのって、どんなところ?」

「髪長ザーメン。オカマ?」

「田舎者だな。遺伝?」

「てか、日本人なのに留学生って何で？」

「背高いけど、何かスポーツやってるの？」

いや、フロイトに聞いているであろう質問は良いことじて、俺のはじめよ。

焼き入れる？

「はいはい。転入初日の留学生を、そんなに既でわやくちゃにしないの」

と言つて、アリサが近付いてきた。流石、仕切り魔！！

「アリサ・・・」

お？フロイトが助かつたつて顔してるぞ。

「それに、質問は順番に。フロイトも龍斗も困つて」「いや、俺は別に・・・困りなさいよ！..」

いやー、そう言われる方が困るんだが。

「だってよ、俺の質問なんて僻みか妬みにしか聞こえねえし

「龍斗・・・」

フロイトが、不安そうに袖を掴むが、ここはあえてスルー。

「それによ。これ以上、俺にトラうねえ事ぬかしたら、はつ倒すぞ」

俺は、シグナム達に向けた殺氣の1／100位を、ナマ言つてた奴等に向けた。

すると、そいつ等は黙つたので、この場は良しとした。

そんでもって、昼休み。

俺は、弁当をフェイトに渡すために席へ向かった。
何で、俺がフェイトの弁当を持つてるかって?
そいつは、俺が作ったからさ!…

「フェイト、ほれ」

俺は、そう言つとフェイトに弁当箱が入つた包みを差し出した。
フェイトはそれを受け取つて、大事そうに抱えて。

「ありがとう。 龍斗」

うつむく。とびっきりの笑顔つか!!

場合によつては、鼻血もんだぞ。

「気にすんな。ついでだ」

てな会話をしていると、なのは達が一緒に昼食を取ろうと誘つてきた。

その日の放課後に、俺の下駄箱に『不幸の手紙』らしき物があつた
が、近くの柱から覗いていた連中（俺に下らねえ質問をした奴等だ
と思つ）を睨み付けたら、その後は何も無かつた。

(ビビるなり、最初からやるなよガキが。・・・って、今は俺もガ
キか)

そして、龍斗とフェイトの転入後『美男・美女が舞い降りた』と学
校中が大騒ぎになっていたらしいが、龍斗は知る由もなかった。

『 | | 度田の小学生をやめに当たつて、最近の小学生は生意気なことを心がむかす』

龍斗「おー。サブタイの内容と違く無いか？」

どり「多分、大丈夫だと思いたい・・・」

リア「内容が違つことは、気が付いてくるようですね」

龍斗「ああ。でもよ、この量書きの時間掛けすぎじゃね？」

リア「やつですね。私も、失望しました」

どり「ちゅう？！何で今回ま、そんなに虚めるの？」

リア「だって、私の出番が有りませんでしたから」

龍斗「俺は、いつもの事だ」

どり「いやーだ。・・・こじけてやるーーー！」

龍斗「やべ、ひとつのも消えたしやるか」

龍斗&ドリ「今回も本編を」と愛読頂きまして誠に有難う御座います」

龍斗「つきましては、皆様からの意見・感想の程を頂ければ幸いです」

リア「尚、誹謗・中傷に関しては厳しく対処させて頂きますの

で、」ト、承下せり

龍斗&リア「では、次回『彼等の戦つ理由をもつと知りたいから、色々な場所から覗き見して逮捕される作者はいるのかな?』」

ナハト「心して見よ!」

ゼラ「ナハト、次の次くらいには出番増やすよ。・・せつと、多分

ナハト「どちらだ!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8859/>

魔法少女リリカルなのは～舞い降りし翼～

2010年10月16日13時23分発行